人類学博物館紀要　　第 43 号
（ISSN　0388-8711）

南山大学人類学博物館紀要

第 43 号

南山大学人類学博物館

2024

巻頭言

2024 年 11 月 10 日付の朝日新聞のフォーラム欄に「ミュージアムとジェンダー」という記事が掲載された。ここでは、国立歴史民俗博物館やトヨタ博物館での事例が紹介されている。

国立歴史民俗博物館では、共同研究員との意見交換や、大学生に展示の問題点についてプレゼンしてもらう授業を通じて、展示の中でのジェンダーの視点の欠如が指摘されたという。また、トヨタ博物館では、自動車と女性とのかかわりを常設展や企画展によって示そうとしている。そういえば、名古屋市にある「あいち創業館」では、紹介される予定だった「産業偉人」54 人全員が男性であったことから、批判が上がり、今年度（2024 年度）中に 6 人の女性起業家を加えることで対応するということもあった。

博物館をはじめとした展示施設では、展示担当者の価値観や思想、時代背景があからさまに反映してしまうことがある。それはある意味で展示というものの本質であり、完全に排除することはできないであろうし、またそうすべきだとも思わない。しかし、少なくとも、今日的な課題を意識しながら、展示を構想していくだけの配慮は欲しいものだ。

上述のジェンダー問題以外にも例を挙げることはできる。

博物館は誰にでも開かれた教育機関であることを標榜しながらも、実際には、心身の障害など様々な差異を可視化しながら、必ずしも「全ての」人に開かれていない現実を見ていないのではないだろうか。

博物館では収蔵庫等に 24 時間空調を採用しているところが多いが、エネルギー問題や環境問題が取りざたされる中、なぜ博物館だけが特権的にそうした問題の例外として扱われ得るのだろうか。

世界の博物館では、植民地主義の時代に収奪された様々な文化財の返還問題が生じているが、これは各国間の力関係の不平等を今日までも引きずっているのではないだろうか。

今日、世界の人口の 10 人に 1 人は極度の貧困状態にあるとされるが、なぜ博物館や美術館では非常に高価な資料や作品が収集・収蔵され、また、作品や資料を保存し、見栄えよく展示するという目的のためにお金をかけた建物が建築されるのであろうか。

博物館のコレクションの中に、先住民に関わるものがあった場合に、博物館はどのように対処すべきなのだろうか、等々。

こうした観点から、今日の博物館の在り方を全否定しようというのでは、もちろんない。ここで言いたいことは、博物館は決して無垢な存在ではないし（それは歴史的にも明らかだ）、現代的課題に寄与すべきはずがその真逆となっているという実情がある、ということを肝に銘じたい、ということである。

21 世紀の前半もすでに 25 年が過ぎようとしている。考古学の言葉で言えば、21 世紀の第二四半世紀になろうかという時代である。できることならば、これからの 100 年を見越した博物館の在り方を構想しても良い時期ではないだろうか。

2024 年
南山大学人類学博物館

目　次

巻頭言

南山大学人類学博物館所蔵　陶質土器について
…… 木村光一… 1

人類学博物館のコレクション史と整理状況
…… 井原瑠梨… 25

南山大学人類学博物館所蔵　陶質土器について

木村光一

はじめに

もう40年近く前、まだ大学院博士前期課程に在籍していた頃、母校の南山大学人類学博物館で、自分が専攻する韓国三国時代に関連する土器・金属器が展示されているのが目に入った。いつかは実測を兼ね詳しく観察する機会をもちたいと思っていたが、技量の問題もあり、ひとまず何箇所かの発掘調査現場で、資料館で、調査と報告書作成のため、出土遺物の実測経験を積むことに専念していた。さらに韓国でいくつかの大学校や国立博物館などで（当時はまだ、文化財研究院といったものは存在していなかった)、陶質土器を実見し、実測させていただくという経験も積ませていただいた。そうして、当時、博物館運営の全般を取り仕切っていた重松和男助教授にお願いし、まず陶質土器から実測をさせていただくことにした。

実測図に若干のコメントを添え、これも重松先生のご好意で、『南山大学人類学博物館館報』のシリーズに「本館所属朝鮮半島出土陶質土器について」という題名で刊行もしていただいた（木村 1987)。

やがて博士前期課程修了後、社会に出てからは、毎週土曜日の休日を利用し、博物館に通って今度は金属製品の実測にとりかかった。その成果は、十年近くたったあと、拙いコメントを添えて発表することができた（木村 2007a、2007b)。

ただ、そこに添えたコメントを今読み返してみると稚拙で、つくづく不勉強だったな、ということを痛感するばかりであった。そういった事情もあり、今回、あらためてもう少し勉強させていただいた部分をも含め、これまでの拙稿を改訂したいという気持ちがわいてきたのであった。もう1点、自分が拙稿を発表した時点から、陶質土器編年もより精緻になり、年代についても議論が収束した部分が大きくなったことも感じていたからであった。

さらに、今回あらためて稿を起こそうと考えたのは、一部の土器のうちに、実測当時展示状況等から半島出土品と捉えていたもののなかに、博物館に資料登録された当時の内容が判明し、そこから一部に日本列島内の遺跡出土品である可能性が出てきたからであり、そういった点についてもあらためて再検討の必要があると、感じたからであった。場合によっては前記

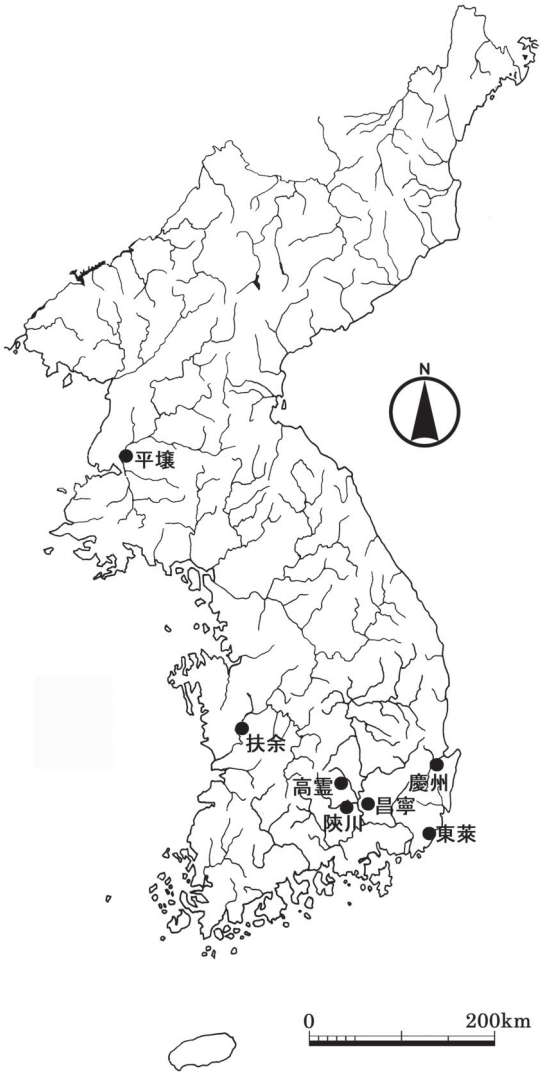


図1　本文中で言及する遺跡の位置

『館報』の内容を訂正する必要があるとも感じたからであった。

幸い、南山大学人類学博物館で館蔵品をあらためて実見、観察、そして写真撮影する機会をいただくことができたので、その成果も合わせ、これから述べていきたいと思う。

なお、本稿における館蔵品の実測とトレース、写真撮影および拓本はすべて筆者によるものである。本文中で言及する遺跡等の所在地は、図１の地図を参照していただければ幸いである。

1. 陶質土器

南山大学人類学博物館が所蔵している、記録とも一致し、器形などから半島からの将来品の陶質土器としてよいものは２点あった。残念ながら将来の際の詳細な記録を欠いているものの、ほとんど完形で、各々に博物館の登録番号がうたれている。なお、以下で述べる数値のうち、径に関わるものはすべて直径である。

(1) 短頸壺　No. 10-594[1]（図 2-1）

小型で、口径 7.0cm、器高 11.6cm、を計る。口縁端部を折り返して、玉縁状に仕上げている。胴部上半は丁寧にナデていて、内面が不明なため、外面からの観察からは粘土紐巻き上げ、タタキなどの痕跡は見出せなかった。下半は、縦方向の稜が残り、底部まで静止状態でヘラ削りを施したことがよくわかる。底部外面にもヘラ削りがおよび、安定した水平をなさない。胎土は粗く、砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。

「朝鮮楽浪出土漢代壺」と表面に注記され、なかに「朝鮮平安北道平壌附近

楽浪遺跡発掘

土器（原文縦書き）」と３行で書かれた紙片が詰め込まれていた。

この土器について、類例をもとめ、図２に示してみた。器形、暗灰色という色調、胴部外面下半に施された縦方向のヘラ削り、といった特徴をもとに探してみると、平壌石巌里（ピョンヤンソッカムニ）９号出土の壺（平底長頸壺として報告されている）にいきあたった[2]。

石巌里９号墳は、出土した紀年銘のある漆器、青銅製容器類、内行花文鏡などから、紀元１世紀初め頃の楽浪郡の上位にあたる官人を埋葬した木槨墓とみられる。男女が合葬された女性側の頭部上部の空間から出土した壺は、灰色軟質と報告されている。図２の２に示すように、口縁端の形状は若干異なるが、外反気味に開く頸部、胴部下半の縦方向の手持ちヘラ削り、平底（館蔵品は完全な平底ではないが）などに館蔵品との共通点がみられる。館蔵品の色調が、暗灰色を呈する点も共通する。

石巌里９号墳出土壺の特徴と、編年的位置付けについては、高久健二氏による研究がある（高久 1993：43 頁以下）。そこではまず「頸部がやや細長く伸び、器高／口縁径の値がおおむね 1.3 以上」という器形上の特徴があげられている。実際、館蔵品短頸壺の場合は 11.6 ／ 7 とすると、1.65 であり、合致する。高久氏はこの器種を単に壺として、I ～ III の３型式に分類しているが、I 型式の特徴を「頸部が斜め上方に立ち上がり、口縁端部がやや屈曲する」ものとしている。これがそのまま、館蔵品短頸壺にあてはまる。高久氏によれば壺の出現期にあたり、氏の楽浪土器編年のなかでは III 期に該当し、暦年代は石巌里９号墳のものも参考に１世紀初にあたるとされる。

ほかに１点、館蔵品と類似した器形、焼成をとるものとして、図２の３に示す平壌統一洞（トーンイルドン）47 号墓出土の壺（灰陶罐として報告されている）があった。器形全般と、色調も灰色である点に類似性を求めることができる[3]。単槨単棺墓で一方の短辺近くから出土した土器２点のうちの１点である。もう１点の土器は、短頸壺（黄灰陶罐）であった（鄭永振・李東輝・鄭京日 2014）。周囲のほかの木槨墓等からみて楽浪時代の遺構とみられる。

ただ、焼成という面では館蔵品は軟質というよりも堅緻であり、そこに相違点をみることができる。その点を除けば上記類例とも対比可能で、「朝鮮平安北道平壌附近　楽浪遺跡発掘　土器」という紙片の記載も裏付けられると考えられる。時期的には、先の高久氏の編年にしたがい、紀元１世紀初めとすることが妥当と考える。

なおもう１点、写真で確認したのみなので、検討の対象からは外したが、『朝鮮古蹟図譜　第１冊』にある平安南道大同郡大同江面梧野洞（ピョンアンナムドテードンダンテードンガンミョンオヤドン）（現在は平壌市内）所在楽浪木槨墓出土の坩（関野 1915：29 頁 118 番）も類例としてもよいと考えられる[4]。

(2) 有蓋椀

有蓋盒、有蓋坏、有蓋碗など各種の名称が用いられている器種ではあるが、ここでは、有蓋椀を用いる。蓋と椀をまとめて１つの番号で登録しており、登録段階で明確にセットをなすと認識されていたものと考え

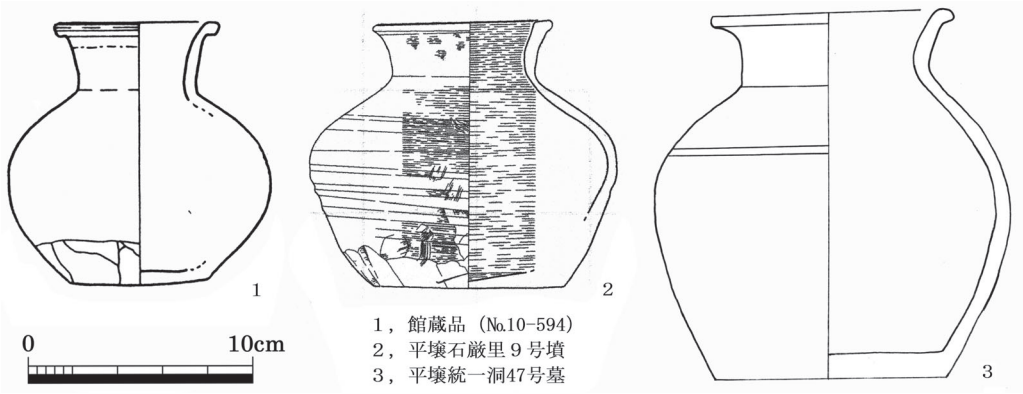


図２　館館蔵品とその類例１

られる。

2-1　蓋　No. 10-496（図 3-1-1）

口径 18.3cm、つまみ径 4.0cm、器高 5.8cm を計る。下端から半球形に立ち上がり、天井部には、環状のつまみが付く。体部外面上半に、5 連単位の連続馬蹄形文を単純押捺手法（a 手法）（宮川 1988、1993）で 2 段にわたって施している。下段にあたる馬蹄形文の上端は、器面に沿って縦長に伸びている。体部外面は施文前に反時計回りの回転ヘラ削りを施し、内面には、同方向のロクロ回転の稜が回転横ナデによりなだらかに残っている。口縁部直上には、椀と組み合わさるためのかえりが付く。胎土は、粗い。焼成は、やや不良で軟質であり、器形も歪んでいる。色調は、黄色がかった灰色を呈する。

2-2　椀　No. ナシ（図 3-1-2）

口径 16.7 ～ 17.7cm、器高 7.8cm を計る。環状の高台が付く。高台径は 8.2 ～ 8.5cm になる。底部から内湾気味に立ち上がり、中途から直立気味に口縁にいたる。外面口縁端部には 1 条の沈線が入り、沈線の下から胴部上半に 5 連の連続馬蹄形文を 1 段単純押捺手法で施している。文様自体は蓋よりも原体が若干大きい。また、体部外面は施文前に、反時計回りの回転ヘラ削りをしていることが、遺された稜から確認できる。胎土は粗い。焼成は、やや不良で、器形にも歪みがある。色調は、薄い灰色を呈する。

この種の土器は、新羅後期様式の範疇に属するものである[5]。上記の特徴をもとにすると、館蔵品は朴成南氏の分類による蓋 F と椀 A の組み合わせになる（朴成南 2022：41 頁以下）。

朴氏によれば蓋 F の特徴には、環状つまみ、口縁内部のかえり、やや高く広い頂部から曲線を描いて拡がる外形などがあり、館蔵品の特徴と一致する。同様に椀 A の特徴は、体部に 2 ～ 3 条の沈線、平坦な底部から湾曲しつつ口縁へ向かう体部などがあり、やはり館蔵品の特徴と重なっている。ただ、館蔵品は口縁部直下外面に沈線はあるが、体部にはない。

図 3 に、高台、器形等が類似する出土例を示してみた。口縁部の形状、椀でいえば口縁直下外面の沈線、蓋でいえば天井部へ続く弧線や口縁部のかえりの形状などからみて、朴成南氏のご教示によれば、図 3 の 2、3 に示す扶余（ブヨ）[6] 定林寺（ジョンニムサ）址蓮池からの出土例（李熙濬 1990）が、館蔵品に器形が近い。

朴氏の新羅後期様式土器編年、段階設定を参照するならば、館蔵品は第 2 段階にあたる。なかでも館蔵品のような椀 A では、「口縁端部の外側に 1 条や 2 条の沈線が施される」2b 期になると考えられる（朴成南 2022：50 頁）。2b 期の場合、沈線は当初体部にもめぐり器面を分割するが、しだいに体部の沈線はなくなっていく。館蔵品はこの段階にあたると思われる。言い換えれば 2b 期でも遅い段階、2c 期に近い段階にあたるといえる。2b 期の施文は 5 連以上の連続馬蹄形文が基本とされ、館蔵品の文様とも整合する。そして、器形、印花文が単純押捺技法をとる点などからは、時期的には 7 世紀末から 8 世紀初ころとみられる。出土事例や分布などから製作地が慶州（キョンジュ）地域と考えられる点は、博物館の記録とも矛盾しない。

2. 国内で出土したとされる陶質土器

前稿（木村 1987）で、陶質土器として館報に紹介した土器のうち、2 組 3 点について、紹介後国内の遺跡からの出土品として博物館で登録されていたことがわかった。筆者は 3 点の土器は、いずれも器形、製作過程全般から陶質土器と考えている。その是非も含め以下、土器の紹介と考察を行いたい。

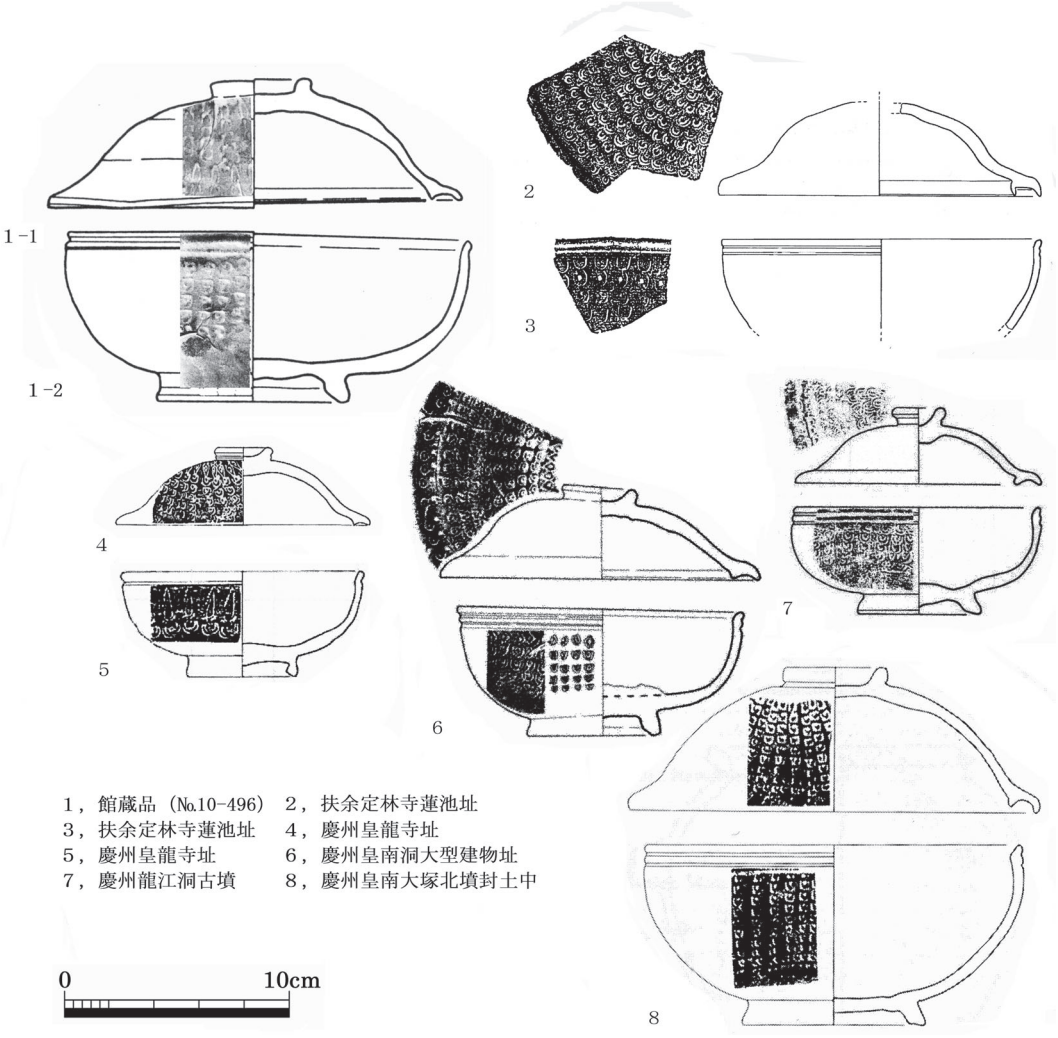


図 3　館蔵品とその類例 2

（1）高坏　No. 3-134（図 4-1）

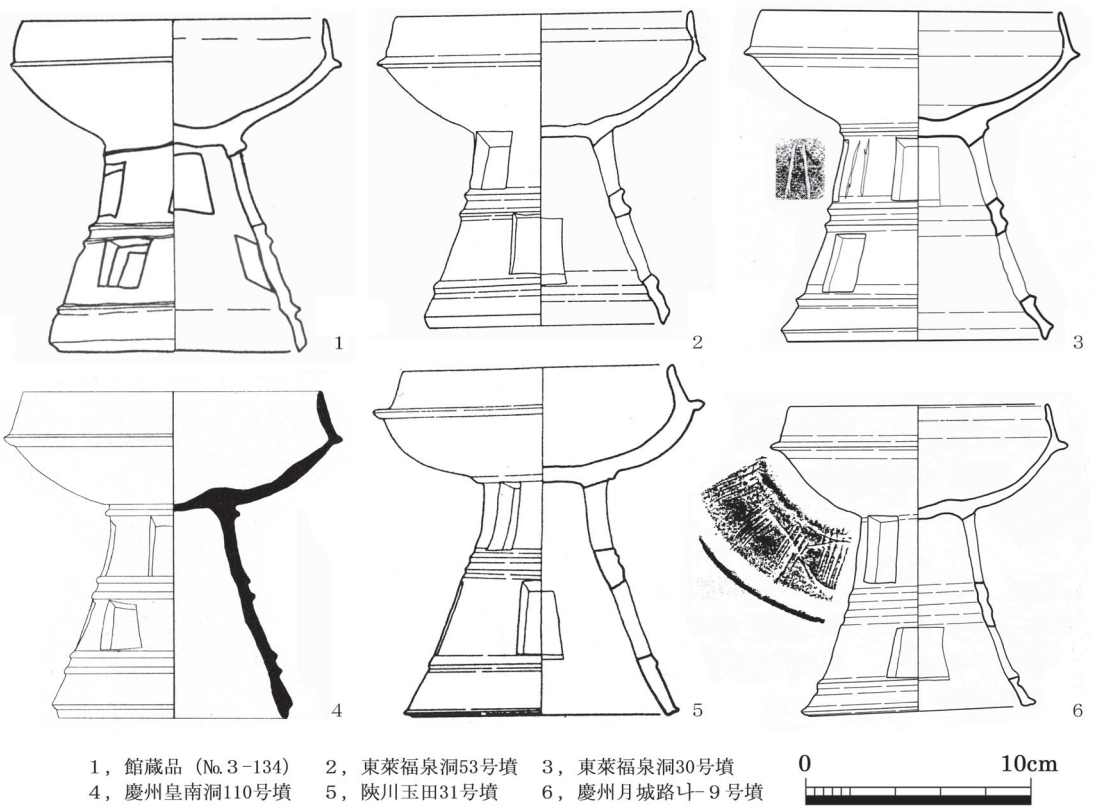
①館蔵品についての観察結果

口径 13.6cm、底径 10.3cm、器高 14.7cm を計る。坏部に蓋受が作り出してある。坏部は内面に反時計回りのロクロ回転の稜が、回転横ナデを施すなかでなだらかに残り、白井克也氏のいうミズビキ成形されていると考えられる。立ち上がりはやや内傾気味で、口縁上端を水平に面とりしている。肉厚で坏部の底の厚さが 1cm 近くになる。坏底部は、中央がやや盛り上がり平坦ではない。脚部は、ほぼ直線的に開いたまま接地し、長方形の透窓[7] を 2 段交互に、4 箇所ずつ切り出している。脚端は斜め内側に削って、面を形成している。坏部と脚部が接合する箇所に 1 条、2 段の透窓のあいだには 2 条、下段透窓下部には 1 条の、全部で 3 段にわたる突帯を削りだしている。この突帯のうち、中段と下段のものにより脚は 3 分され、3 段構成をとる。胎土は粗く、砂粒を多く含む。焼成は良好だが、焼き歪みが大きい。色調は、暗灰色を呈する。重量感があまり無く、むしろ、軽さを強く感じさせる。

以下の記述にも関係するが、この高坏は日本列島産の須恵器ではないことは確実と考えている。実際、日本出土の初期須恵器に、類似する器形のものはなく（例えば、酒井 1994）、むしろこれから述べるように朝鮮半島出土品に類例を多数求めることができるからである。陶質土器であるという前提のもと、以下の点を指摘できる。

脚部を切り出した長方形の 2 段交互透窓であるが、これによって、陶質土器の地域性を初めて指摘した金元龍氏以来、洛東江（ナクトンガン）以東様式あるいは慶州地域様式の範疇に属する個体とすることができる（金元龍 1960：6 頁以下）。

つぎに、脚部自体の 3 段構成である。洛東江以東様式の陶質土器編年では、高坏の脚部は 3 段構成から 2 段へと変遷することが諸研究者の相対編年でも一致



1，館蔵品（№.３-134）　2，東萊福泉洞53号墳　3，東萊福泉洞30号墳
4，慶州皇南洞110号墳　5，陜川玉田31号墳　6，慶州月城路나-９号墳

図４　館蔵品とその類例３

をみている（例えば、白井 2003　早乙女 2010：148–149 頁）。高坏の器種自体、当初は無蓋高坏で、有蓋高坏は遅れて出現することも同様である。

上記、館蔵品と同じような特徴をもち、3 段構成脚をとる有蓋高坏を、図 4 に例示してみた。洛東江以東様式といっても、管見では結果的に、新羅の中枢慶州出土例よりも東萊福泉洞（トンネボクチョンドン）古墳群[8] 出土例に類例をいくつか求めることができた。そこで以下、福泉洞古墳群の出土例を中心に述べることにする。

福泉洞古墳群では、館蔵品の類例とはなりえないため図示はしなかったが、21–22 号墳出土品の場合すべて無蓋高坏で、脚部が 2 段構成となるものは脚長が短く、ある程度の高さを有する個体はほぼすべて 3 段構成をとっていた（鄭澄元・洪潽植ほか 1990）。一方、10–11 号墳出土高坏の場合、はほとんどが 2 段構成脚をとる（83 点中 81 点、98％）（鄭澄元・申敬澈 1982・1983）。図示した福泉洞 53 号墳出土品の場合、ほとんどすべての有蓋高坏は 3 段構成であった（宋桂鉉・河仁秀ほか 1993）。21–22 号墳は福泉洞古墳群の編年の上でも古い時期の所産とされ、より新しい時期とされる 10–11 号墳（例えば、白井 2003b：3 頁　李熙濬 2019：71 頁以下）との関係は整合し、53 号墳は両者の中間に位置付けることができる。新羅慶州からの出土例では、3 段構成高坏脚をとる皇南洞（フォアンナムドン）110 号墳出土例が古いものとされ、福泉洞 53 号墳とほぼ並行する時期のものと考えられている。

別の面から 10–11 号墳の方が 53 号墳よりも若干遅い時期になるという見解がある（宋桂鉉・河仁秀ほか 1993：97 頁）。突帯断面が三角形である点、慶州皇南洞 110 号墳との類似が根拠となっている。確かに図 4 の 4 に示した皇南洞 110 号墳出土例は、白井氏によりミズビキ成形により坏が作られていることが指摘されている（白井 2003：3 頁）点、10–11 号墳出土例や皇南洞 110 号墳例は、53 号墳出土例が円板巻上により製作されている点を比べても、この見解が裏付けられる。

以上をまとめると、福泉洞 21–22 号墳→福泉洞 53 号墳・皇南洞 110 号墳→福泉洞 10–11 号墳という配列をひとまず想定できる。

3 段構成脚の場合、別に突帯の数、特に 2 段透窓同士の中間の突帯（中段）と、下段の突帯の数により新旧を判断する考えがある。中段も下段も 2 条であるものから、下段が 1 条になるものが新しいとされる（金斗喆・安星姫ほか 2016：134 頁以下）。館蔵品は中段 2 条、下段 1 条になる。図 4 でいえば、2 の福泉洞 53 号墳、3 の福泉洞 30 号墳出土例が同じである。皇南

洞 110 号墳出土例は、中段、下段共に 2 条であり、この時代的傾向が正しければ、館蔵品は 110 号墳例よりも新しい段階に位置付けられる。したがって、上の配列に館蔵品も組み込んでみるならば、福泉洞 21–22 号墳→皇南洞 110 号墳→館蔵品・福泉洞 53 号墳→福泉洞 10–11 号墳というように、段階を細分できる。

脚部の開き方および接地の仕方でいえば、館蔵品は脚端の処理も含めほぼ直線的になっている。陶質土器編年上、高坏の脚部は古式陶質土器段階には、脚部中央が）（のように明瞭にくびれたり、曲線を描いたままラッパ状に開いたりしていたが、洛東江以東様式成立以降はしだいに直線化する傾向を示す。館蔵品も直線化した段階に属するものと考えられる。さらにいえば、脚部が直線的に開いたまま接地する点は、図 4 の 5・6 に示すような下端近くがやや曲線的に開く事例よりも古い要素になる（白井 2003b：3–4 頁）。事実、図 4 の 5 は陜川玉田（ハプチョンオクジョン）古墳群で慶州様式土器が出現する、その嚆矢となるものである。かつての伽耶諸国の一つ多羅国の故地（東・田中 1989：222–223 頁）、陜川の地（洛東江以西）[9] に新羅慶州の何らかの影響力が、最終的な政治統合に向けて及ぶようになってからのものであり、相対的に新しいものと考えられる。

あらためて福泉洞古墳群出土例にみられる高坏脚部の開き方を整理すると、21–22 号墳出土例は、曲線的で古式陶質土器の様相を示す。53 号墳の場合直線化している。10–11 号墳では直線化した脚部に、やや曲線化した脚部をもつ例が混じる。図 4 の 4 に示す慶州皇南洞 110 号墳出土例も、脚部は直線化している。この点からも、福泉洞 21–22 号墳→皇南洞 110 号墳→館蔵品・福泉洞 53 号墳→福泉洞 10–11 号墳という配列は整合性をもつ。

以上館蔵品を、類例となるものを介して年代等を探ってきた。結論的にいえば、館蔵品の特徴は、洛東江以東様式が成立したあと、有蓋高坏がそこに出現し、脚部が直線的に開くようになっていくなかで、いまだ 3 段構成でありつつも、下段の突帯が 1 条になった段階に該当する。白井克也氏の編年でいえば新羅 IIA 期古段階（白井 2003b：3–6 頁）、李熙濬氏の編年でいえば Ib 期の半ば（李熙濬 2019：69–71 頁）にあたる。ただ、さらに Ib 期を細分すると、皇南洞 110 号墳例よりも若干新しく、福泉洞 53 号墳とほぼ並行する段階に位置付けることができる。暦年代でいうと、5 世紀中葉の可能性が高い。出土地は、現状では慶州あるいは東萊地域になるとみられる。

もちろん、2 段交互透窓で 3 段構成をとる高坏脚部は、洛東江東岸、昌寧（チャンニョン）地域様式土器にもみることができる。しかし、昌寧地域様式土器の場合、館蔵品を含む慶州、東萊地域の土器と比べると、坏部が浅い、器高に占める脚長の比率が高い点が異なっている（朴天秀 1993）。

②収蔵経緯に関する問題

ところで、この有蓋高坏に関しては、ローマ数字による整理番号（遺跡番号）が付けられており、千葉県市川市にあった日本考古学研究所[10] からの移管品であることがわかる（秦 2022：46 頁）。そこに以下の記録が伴っていることが判明した。

「ヒノサン横穴群　　島根県八束郡法吉村奥谷比之
　1 号墳　1949（S24）／ 4 ／ 14
　6 号墳　1949（S24）／ 8 ／ 20
　8 号墳　1949（S24）／ 9 ／ 14 ～ 15
　9 号墳　1949（S24）／ 9 ／ 18」

である。各遺構の後に続く部分は日付とみられるが、遺構ごとに異なるので、研究所への収蔵日ではなく、調査（出土）年月日と考えられる。

高坏の来歴をもう少し詳しく述べると、以下のような点をあげることができる。

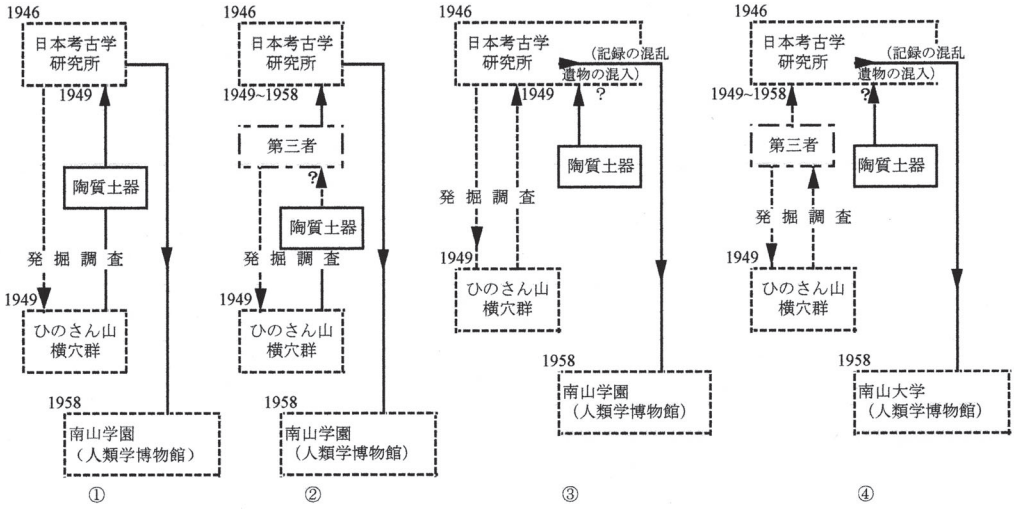
1：考古学研究所からの移管にあたっての、現在人類学博物館に遺されているヒノサン山横穴出土品のリストには、この高坏が「須恵器高坏」として、他の出土品と一連の番号を振られて載っている。

2：1976 年に作成された手書き台帳（古市 1976）には、9 号墳出土として、一連の番号のもと載せている。

3：後日、ヒノサン山横穴出土品を撮影した写真アルバムが作成されているが、そこにはこの高坏は載せていない。登録番号と遺物が対照できるようになっているが、当然、この高坏に伴う番号は抜けている[11]。

上記の記録について、今回、本稿をまとめるにあたり、博物館了承のもと検証を行ってみようと考えた。冒頭にもふれたように筆者が 40 年近く前に、陶質土器として資料紹介（木村 1987）を行った際には、筆者自身こうした記録があることを知らず、また博物館側からもこういった記録があることを指摘されなかったからである。合わせて現在博物館にも、記録の根拠となる資料が皆無であるからである。

いちおう、博物館に残された上記の記録に沿ったかたちで、この陶質土器高坏が南山大学人類学博物館に帰するにいたった、想定できる経緯を模式図にしてみた。図 5 に示したように、4 つの場合が想定できる。



※実戦で示した部分が、想定される南山学園（人類学博物館）への収蔵経路。
※数字は、その出来事が起きたと考えられる西暦年（幅が想定できる場合には期間）。

①は、日本考古学研究所が**直接ひのさん山横穴群を調査し、出土した陶質土器を**保管し、南山学園（人類学博物館）へ移管した場合。
②は、日本考古学研究所が、**第三者（研究所関係者？）がひのさん山横穴群を調査して入手した陶質土器を**保管し、南山学園（人類学博物館）へ移管した場合。
③は、日本考古学研究所が行った**ひのさん山横穴群への発掘調査の出土品に、別に考古学研究所に保管されていた陶質土器が混入**し、そのまま南山学園（人類学博物館）へ移管された場合。
④は、**第三者**（研究所関係者？）**が行ったひのさん山横穴群への発掘調査出土品を**、日本考古学研究所が**保管するうちに**、さらにそこ**に別に保管されていた陶質土器が混入**し、そして南山学園（人類学博物館）へ移管された場合。

図５　ヒノサン山横穴出土とされる陶質土器の収蔵過程模式図

そこで、高坏が出土したとされるヒノサン横穴群についての情報を集めてみた。

ヒノサン横穴群というのは、1991年に公式にはひのさん山横穴群という名称で『松江市遺跡地図』に登載されている遺跡（遺跡番号K017）である[12]。所在地は、松江市法吉町鷹沢となっているが、地名変更が実施され、現在は松江市淞北台である。以下の記述では、引用部分を除き公式名称の、ひのさん山横穴群という表記を使用する。

考古学的調査は、「島根県遺跡データベース」（島根大学地域貢献推進委員会2004-2005）によれば、山本清、近藤正の２名による発掘調査の履歴がある。発掘調査は、「山本清考古資料」によると、1967年のもので、前島己基氏が宅地開発にともなって行われた（前島1982）と記した調査にあたると考えられる[13]。

上の調査担当者の一人、山本清氏の手による「山本清考古資料」には、これとは別に1950年ころに作成された「ひのさん横穴群」の遺構実測図、出土遺物実測図があり[14]、山本清氏が関係した何らかの調査が1967年以前にすでに行われていた可能性が高い[15]。実際、本文でもあとでふれるように、山本清氏は氏の1962年発表の論文のなかで、具体的な図、写真を伴わないのにもかかわらず、「年代分明な須恵器が出土した横穴」（山本1962：25頁）のひとつとして「ヒノサン山」をあげており、同時に横穴の形式分類も行っているので、論文執筆の段階で出土した須恵器、遺構についての何らかの情報を得ていたことは確実である。

ひのさん山横穴群の遺構は、前述の前島氏の言葉を借りれば、「整正な家形天井をなすものは見られず、玄室は大半、天井と壁面との区別がないもので、特に玄室横断面がゆるやかに膨らんだテント状」（前島1982）であり、山本清氏は「天地根元様」（山本1962：29頁）と名付けている。

ただ、1950年当時の図面と、南山大学人類学博物館の1949年の記録との関係は不明である。双方の記録が、２年にわたって実施された一連の発掘調査の結果のものが、２箇所に分かれて遺されたとは考え難い[16]。「山本清考古資料」に残された1950年の遺構・遺物実測図は、館蔵品と出土遺構名に相違があるものがあり、同じような名称の横穴墓の場合でも、須恵器の器種が一致しない点があるからである。もちろん、今問題にしているこの高坏はない。

ひのさん山横穴群の出土遺物について、現在までに

筆者が知りえたものには、実物資料、実測図、写真、あるいは文書によるもので、以下のものがある。

実物資料は、今述べてきた南山大学人類学博物館に収蔵されている遺物で、4基の横穴墓の出土品と出土遺構不明なものである。内容は、所在不明のものを除けば須恵器、土師器、問題の陶質土器で、計31点におよぶ。詳しくは後掲の表4を参照されたい。

いちおう実物資料の範疇に含めてもよいかもしれないが、筆者が写真で知りえた資料には、「島根県遺跡データベース　ひのさん横穴群」（島根大学地域貢献推進委員会2004–2005）の項目で指摘する、『須恵器大成』所収の「ヒノサン山4号墳」出土の須恵器高坏と直口壺各1点（田辺1981：参考図版157、163）があった。図6の写真が、そうである。また、島根大学総合博物館のホームページ、島根大学標本資料類データベース（島根大学総合博物館アシカル2011）にも、出土遺構不明ながら、「ヒノサン山横穴」出土の土師器高坏1点が公開されている。

実測図は、やはり上でふれた「山本清考古資料」に、1967年調査時の公開された分、1950年？調査時の公開されていない目録に、須恵器、土師器、鉄刀がある。

さらに、文書でしか知りえないが、1949年調査時に鉄器（内容不明）13点、木炭一括があり、南山大学人類学博物館側の記録によれば、（愛知？）「県埋蔵文化財センターへ移管」されたとある。加えて1967年調査時の、これも確実ではないところもあるが人骨2体がある。松江市が実施した行政発掘に伴ういくつかの調査報告書には、ひのさん山横穴群から人骨が出土した旨記載があり、蓋然性が高い。それに、上記した「山本清考古資料」中のものと同一品かどうか、記述のみで不明ながら、島根大学総合博物館のホームページ（島根大学総合博物館アシカル2011）に、「ヒノサン山古墳」出土直刀があることが載っている。ほかに、先の前島氏によれば、玄室に屍床として敷かれた須恵器片（前島1982）があった。

ひのさん山横穴群の年代について、調査者の山本清氏は、島根県域の横穴墓をテーマとした上述の論文（山本1962）のなかで、出土した須恵器から氏のいうIII期（山本1960）に位置付けている。ここでいうIII期は、その後の研究の進展により細分され、図6に示す『須恵器大成』所収の写真、あるいは南山大学人類学博物館館蔵品からは、大谷編年（大谷1994）の出雲3期または4期ころ、6世紀後半～7世紀とすることができる。別に、前島己基氏によっても、「6世紀後半から7世紀代を中心」（前島1982）という構築年代が述べられ、共通した年代観を示す。前島氏の記述は1967年の調査に基づくものとみられ、20世紀後半を通じて、ひのさん山横穴群の年代観に変わりがないことがわかる。つまり、館蔵品が出土したひのさん（ヒノサン）山横穴群は6世紀後半～7世紀代の所産と考えられ、筆者の考える陶質土器の年代観とは100年近くの年代差が想定されることになるわけである。

ここからは状況証拠にならざるをえないが、これまで述べてきたことは、以下の点に集約ができる。

1）出土したとされる横穴墓群の構築年代と、陶質土器の年代に100年近い差がある。
公表された発掘調査結果に基づく構築年代は、人類学博物館館蔵品に限らず、現在までに出土したほかのひのさん山横穴群の遺物とも整合的である。また、ひのさん山横穴群の他の出土遺物に、長期の伝世を積極的に示すものはみられない。
同じく、島根県域における横穴墓の年代観とも整合的である。

2）1949年当時の出土経緯に判然としないところがある。遺構、遺物に対する調査内容等、調査記録とよべるものが遺されていない。
日本考古学研究所の機関紙であった『日本考古学』をはじめとして、『日本考古学年報』、『考古学雑誌』、『人類学雑誌』等に、当該調査に関する記事、彙報の類が無いかを探ってみたが、見出すこともできなかった。

3）島根県域からは、新羅（慶州）地域様式土器の陶質土器がほかにも出土しているが、年代が異なる（松尾2023）。

以上1～3から、ここに取り上げた陶質土器高坏がひのさん山横穴群出土の蓋然性は低い。

したがって、先に挙げた模式図のうちで、④にあたる経緯が最も蓋然性が高いものとみられる。

図6　『須恵器大成』所収　ヒノサン4号墳出土須恵器

なお、先にも述べたが、ひのさん山横穴群をめぐる、筆者の知りえた限りの考古学関係資料の一覧表を作成し文末に提示しておく。

(2) 有蓋高坏

①館蔵品についての観察結果

蓋と高坏が一連の番号で登録されており、1セットをなすとの認識が確認できる。

2-1　蓋　No. 3-147（図 7-1-1）

口径 14.1cm、つまみ径 3.0cm、器高 5.2cm を計る。後で述べる器面装飾を施す前に全体を回転横ナデ調整しており、調整時に全体を非常にシャープに仕上げることにより、明瞭な稜を作る。つまみは、全体に肉厚で高く、上面が浅く窪んだ坏状をなす。つまみは別作りで、胴部はつまみを押着した部位がやや膨らむが、その点を除けば平坦な天井部になる。口縁は蓋受からやや外側へ開くが、ほぼ直立して接地する。胴部外面には、4条の密集した沈線を挟んで上下に櫛状工具による刺突文（列点文、幼虫文）を斜めに綾杉状に2段にわたって施している。自然釉が天井部から胴部上半の内面に被っていることから、倒立状態で焼成されたことがわかる。胎土は、精良均質である。焼成は、良好堅緻である。色調は、黒色を呈する。

2-2　高坏　No. 3-148（図 7-1-2）

口径 11.8cm[17]、底径 10.3cm、器高 14.0cm を計る。坏部はやや深めで、内面は弧線を描く。立ち上がりは、内傾気味である。内側に、有機物らしいものが固着している。脚部は、長方形の透窓を2段直列に3箇所外から中へ切り出すことにより、3段構成となっている。最上段が細長く、中・下段がほぼ同じ長さで、曲線を描きラッパ状に開いて接地する。脚の下端には2条の突帯を作る。各透窓の下には、フリーハンドの横線が入る。このことからみて、回転による成型後、静止した状態で横線が引かれたことがわかる。なお、位置関係からさらに詳しくみるならば、今述べてきた2つの工程（横線を引くと透窓を切り出す）は、横線→切り出しの順で行われたことが想定される。なぜなら、一部横線の上から透窓を開けている箇所があるからである。こうした2つの工程の前に、脚部外面、坏部の内外面は全体に回転横ナデ調整しており、それに伴って坏と脚の接合面もナデによって明瞭でなくなっている。脚部内面下半はナデ調整しているが、坏部に近い上半は、ヘラ状工具によるカキ目を残したままである。胎土は精良均質である。焼成は良好堅緻だが焼き歪みが著しい。色調は、黒灰色を呈する。

この土器も、まずいえることは、日本列島産の（初期）須恵器ではなく（酒井 1996）、陶質土器である。だとすれば以下の点を指摘できる。

館蔵品は、有蓋高坏1組である。高霊（コリョン）、陜川地域の出土品に、同じような属性をもつ類例を、蓋、高坏それぞれにもとめることができる。まず、蓋に関して述べてみる。上でふれたつまみや天井部の形状、刺突文といった要素は、確かに高霊、陜川地域出土の陶質土器蓋に頻繁にみることができる。しかし、こうした3つの属性が集合した蓋は、意外にも類例が少なかった。高霊地域の代表的な古墳群である池山洞（チサンドン）古墳群[18]、陜川地域で代表的な玉田古墳群出土例のなかでも、なかなか見出せなかった。ただし皆無ではなく、図7の2、3に示すようなものがあった。実際、比較的脚高が高く2段直列透窓をもつ有蓋高坏に伴う、館蔵品のような蓋は類例が少ない。図7の3も高坏ではなく長頸壺の蓋になる。

高霊、陜川地域出土陶質土器で、つまみはいわゆるボタン形をとるものが多く、蓋自体は時期が下ると扁平化し、なかにはほぼ直角に天井から折れて接地するものが出現するようになるとされる（例えば朴升圭 2006、朴天秀 2009 など）。館蔵品は、そうなる以前の段階の高霊地域様式土器にあたると考えられる。結論的には、白井克也氏のいう高霊 I 式（白井 2003a：83 頁）の範疇にあたるものと考えられる。

つぎに高坏自体の類例をもとめると、やはり高霊、陜川地域にいきつく。特に陜川地域で類例が出土している。

館蔵品の類例となると思われるものは図7に示したとおりである。特に、坏部が相対的に深く丸底になり、脚高が高いものは玉田古墳群出土品にみることができる。脚部の作り方でいえば、館蔵品は2段透窓の中間と下段に各1条の横線を施して全体を3段に区画しているが、今類例とした玉田 23 号墳、35 号墳盗掘坑出土例は下段の方は横線ではなく、突帯になっている点が異なる。管見では館蔵品と同様の区画をとるものは見出せなかった。

ところで、同じ3段構成脚であっても図7の4に示す玉田 23 号墳出土例の脚部は、上・中段が細長く、下段で強く開いて接地する。一方、図7の5に示す玉田 35 号墳盗掘坑出土例は、館蔵品と同様の3段構成脚をとる。玉田 28 号墳出土例も、坏部の深さは異なるものの。35 号墳盗掘坑出土例と同様の3段構成をとる（趙榮濟・柳昌煥・李瓊子 1997）。この点からみて、館蔵品の高坏自体は白井克也氏のいう高霊 IA 期

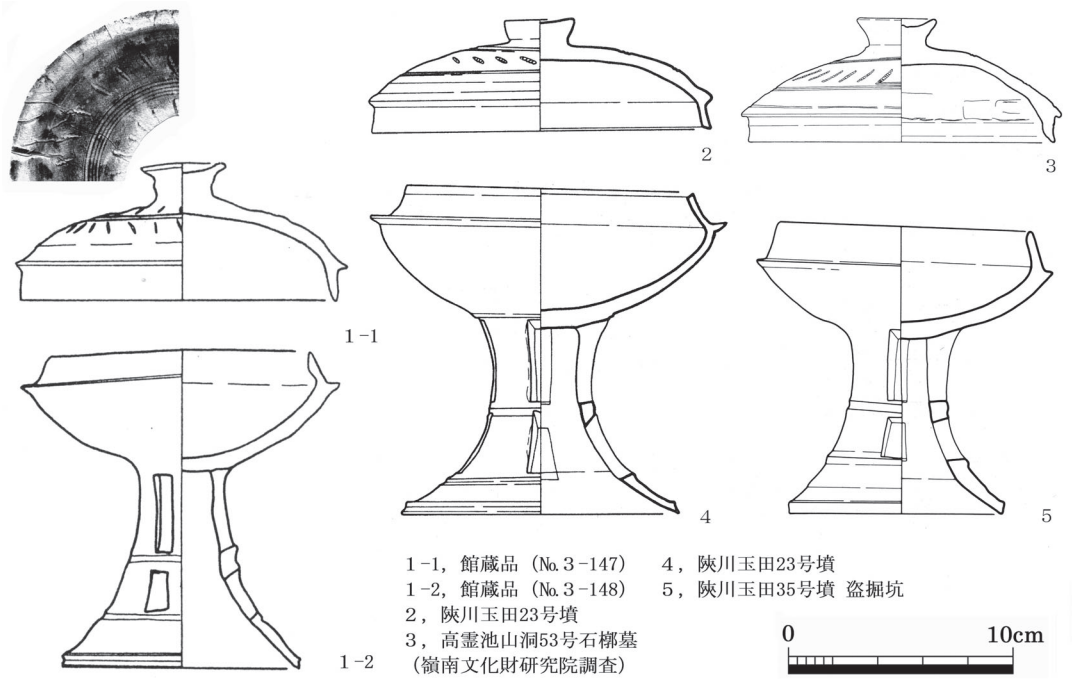


図 7　館蔵品とその類例 4

以降、具体的にはIB期にあたるものとみられる（白井 2003a：83 頁）。

暦年代に関しては、玉田 28 号墳から出土した横矧板鋲留板（短）甲が一つの手がかりとなる。白井克也氏の指摘にあるように「鋲留技法の導入からある程度の期間を経た」（白井 2003a：88 頁）ものとみられ、5 世紀中葉とみることができる。したがって、館蔵品もほぼ同じ頃になると考えられる。

館蔵品も含め、5 世紀中葉に位置付けられる高霊地域様式土器有蓋高坏のうち、今述べたように玉田 23 号、35 号盗掘坑出土品は、図からもわかるように器高に比べ坏部が 1/3 程度の深さをもつ。一方図示はしなかったが玉田 28 号や池山洞古墳群出土品の高坏の坏部は、それほどではなく浅い。そこで、5 世紀代に属する高霊池山洞出土の有蓋高坏と、陝川玉田古墳群の 23 号、35 号（盗掘坑）出土有蓋高坏の坏部の深さを、坏口縁直径との比の値をとって比較すると、統計学的に 5%の優位水準で差がみられた[19]。つまり、玉田 23、35 号盗掘坑出土品が深いのは偶然の結果ではなく、そこには、同じ高霊地域様式土器の範疇のなかに、陝川地域亜様式を細分することのできる余地があるように思われる。今後類例の増加をもって、型式細分ができる可能性をもつ属性である。

②収蔵経緯に関する問題

この有蓋高坏に伴って、千葉県市川市にあった日本考古学研究所からの移管品であり、

「長野県下伊那郡大島村古墳出土、1931（S6）7/15、江坂氏父上から」、

という記録が人類学博物館に残っていた。おそらく古墳出土以下の部分は、何らかの日付、1931 年 7 月 15 日を意味すると思われる。遺された記録についても先の島根県の場合同様、今回、本稿をまとめるにあたり検証を行ってみた。繰り返しになるが、筆者が 40 年近く前に、陶質土器として資料紹介（木村 1987）を行った際には、筆者自身こうした記録があることを知らず、また博物館側からもこういった記録があることを指摘されなかったからである。

実際、記録にある下伊那郡大島村は、1956 年 9 月 30 日付で隣接する上伊那郡上片桐村と合併し、下伊那郡松川町となっている。現在の松川町大島、元大島地区にあたる。

かつての大島村域には、『下伊那史』（市村咸人 1955a、1955b）、さらには『長野県史』（長野県 198 1）に現存、滅失も含めいくつかの古墳の存在が記されている。そのうちには、過去に須恵器が出土した記録を遺している古墳もあり、表 1 のように一覧表にしてみた。全部で 6 基の記録が知られている。なかでも、高坏が出土したとあるのは、落洞古墳と大坪古墳の 2 基になる。後者については『下伊那史』に写真があり図 8 に引用してみた。写真をみる限り、館蔵品とは全く異なり、無蓋高坏で、坏部中央外面に突帯があり、脚部には縦に長い 1 段長方形の透窓をもち、脚端を屈曲

表１　旧大島村域で須恵器が出土した記録のある古墳一覧

地区	古墳名	墳丘（m）		石室（m）			出土須恵器	須恵器を除く出土遺物	出土年時	備考
		径	高	長	幅	高				
大島	落洞 飼込１号 (139)	10	15	—	—	—	**高坏1** 坏1	釘8、銅鈴、金銅薄板（胡籙か？）、雲珠、金環、金銅中空丸玉、瑪瑙勾玉、管玉、土師器、（銀環）	明治初年頃 (19世紀後半)	銀環は、**下伊那史**本文、地名表には出土とあるが、**県史**には記載なし。
	大坪 ビクニ塚 (140)	15	2	—	—	—	**高坏1**	金環1、銀環2、勾玉2、管玉1、切子玉2、棗玉1、土師器	明治15・37年 (1882・1904)	
元大島	神子原 (145)	—	—				破片	土師器	明治初年頃 (19世紀後半)	**下伊那史**地名表には須恵器出土の記載なし。**同**本文では出土とあり、**県史**でも出土を認定している。 出土遺物は、**下伊那史**本文によれば大島小学校（現 松川町立中央小学校）に保管とあり。
	屋敷添 禰宜平 (146)	14	3	4.6	2.0	1.6	坏1 盌1 破片 若干	直刀2、鍔、責金具、頭椎柄頭、馬具類、金環6、瑪瑙勾玉4、管玉2、切子玉2、土師器、 （小玉）	明治35年 (1902)	小玉は**下伊那史**本文、地名表には出土とあるが、**県史**には記載なし。 出土遺物は東京国立博物館蔵。
	證文塚 将軍塚 (152)	—	—				（陶器） 多数	直刀、 （鉄鏃、土師器）	天保年間？ (19世紀前半)	鉄鏃、土師器は**下伊那史**本文、地名表ともに記載なし。**県史**に出土とあり。 **下伊那史**地名表には須恵器出土の記載なし。**同**本文では出土とあり。**県史**も出土を認定している。（ただし、陶器が出土した、としており、現在は跡地に須恵器の破片が散布していると記述している。）
	塚越 (156)	—	—	—	—	—	破片 多数	円筒埴輪、土師器、 金属片	不明	須恵器の出土は**下伊那史**地名表では梶垣外古墳からとしているが、**同**本文では塚越古墳出土となっており、**県史**は塚越古墳出土としている。

凡例　※古墳名について。　県史（長野県 1981）に記された名称による（右側の数字は県史の整理番号）。
下段は、鳥居 1924 に記された別称（ビクニ塚を除く、市川 1955cによる）。
ビクニ塚は、市川 1955bに記された別名。
※墳丘について。　墳形はすべて円墳。径の数値はすべて直径。—は数値不明な古墳。
※石室について。　判明しているものはすべて横穴式石室。—は数値不明、空欄は構造自体が不明な古墳。
※備考について。　下伊那史本文は, 市川　1955a、地名表は市川 1955b、をさす。

図８　大坪古墳出土須恵器高坏

させる６世紀代の須恵器である。前者については詳細不明だが、ともに出土した須恵器坏は実測図が公開されており（岩崎 1988：第 664 図-34、35)、そこからは東山 50 号窯出土品に近く（斉藤・後藤 1995：29-30 頁)、６世紀以降の年代を示していることがわかる。

落洞古墳、大坪古墳の２基も含め、内部構造が判明している古墳はすべて横穴式石室であった。先の『長野県史』によれば、下伊那郡を含むいわゆる南信地域[20] 最古の横穴式石室は、飯田市高岡１号墳、畦地１号墳といった６世紀前半代という年代を示し（岩崎 1988：896-897 頁)、旧大島村域の古墳も、それ以

降に造られたとすれば、年代上も整合する。だとすれば、本稿でとりあげる陶質土器の年代とは、最短で50年程度の年代差をもつこととなる。旧大島村域の古墳から陶質土器高坏が出土したとすると、ある程度の伝世期間を想定せざるをえない。

つぎに、南信地域における、陶質土器も含む渡来文化という観点から、陶質土器をみてみたい。南信地域の渡来文化について、幸い岡田正彦氏が的確にまとめられている（岡田2006）。氏によれば南信地域で出土した須恵器（陶質土器）を含む各種渡来系文物と呼ぶことのできる物品から、南信地域でも下伊那地方は「古墳時代の5世紀中頃から大和政権とのつながりが強化」（岡田2006：79頁）されたとされる。大和政権が南信地域との関わりのなかで重要視したのは、軍用の馬の供給先ということであり、大和政権を経由した渡来文物に、馬具関係のものが顕著である点、馬の埋葬遺構がみられる点に表れている。実際、馬具に洛東江西岸、特に高霊地域とのつながりを示す出土例を見出すことができる（岡田2006：78頁）。そして、そこには製作地と出土地のあいだに顕著な年代差を想定することができていない。馬具にみることのできる渡来文化には、顕著な時期差を考え難いのである[21]。

出土品としての馬具が、そういった様相を示すのならば、同じような文化的背景のもと副葬品となった陶質土器があったとすれば、同じような様相を示すと考える、つまり南信地域へ将来後、あまり時期差をおくことなく副葬されたとすべきであろう。実際、同じ長野県域でも北信地域では、明らかに半島で作られた陶質土器がもたらされ時期をおかず古墳に副葬されているが（笹沢1988）、南信地域ではそういった古墳を、従来の記録をみる限り、とりわけ旧大島村域には発見できないのである。

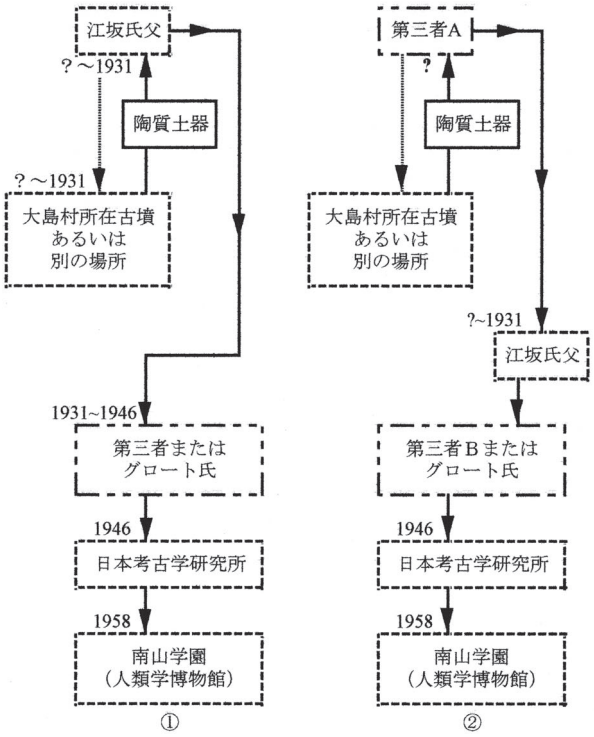
だとすれば、先に陶質土器の伝世を想定してみたものの、そういったことが起きていたとは考え難く、館蔵品陶質土器高坏に伴う「大島村古墳出土」という情報を裏付ける古墳は、実在しない可能性が高いと考えざるをえない。この点について、地元長野県下伊那郡松川町教育委員会（松川町資料館）にも照会したが、町の埋蔵文化財担当者にも、ここでとりあげたような「外来系土器」が出土したという記憶、記録の類は過去にさかのぼってないという回答であった。

松川町教育委員会からは、筆者は未見ながら旧大島村役場が1956年に刊行した『大島村誌』、あるいは下伊那地方の考古学的研究の20世紀前半の一つの到達点ともいえる、1924年古今書院から刊行された鳥居龍蔵の『下伊那の先史及原始時代』を紐解いても、こういった土器の出土の記録、記憶の類はない、という回答をいただいている。

加えて過去の記録をもとめ、先の日本考古学研究所の機関紙『日本考古学』をはじめとして、『考古学雑誌：』、『人類学雑誌』、『信濃（第一次）』、『信濃教育』といった雑誌の記事を調べてみた。しかしながら、大島村から陶質土器（当時の名称でいえば、新羅焼あるいは祝部土器か）の出土を伝えるものは、管見では見出せなかった。一方で江坂氏父のいう「大島村古墳」出土を完全に否定できるような情報も得ることはできなかったのも事実である。

館蔵品を旧蔵していた日本考古学研究所は、第二次世界大戦後の1946年に設立されている。1931年は研究所設立以前になる。1931年が、「大島村の古墳から発見された年」なのか。研究所に入る前に「誰か。江坂氏を知る人物・機関、あるいは江坂氏の父自身の所有に帰した年」なのかは判然としない。ただいえることは、陶質土器自体は研究所が存在する前に、ここでいう「江坂氏父上」が直接、間接に入手し、日本考古学研究所へと伝わったものである、ということである。日本考古学研究所を中心となって運営していたジェラード・グロート（Gerard Groot）氏が来日したのが1931年であり、グロート氏も「江坂氏父上」からの入手は可能であるが、それは考え難いのではないか。

なぜなら1931年は、グロート氏も来日したばかりであり、岐阜県多治見市の修道院へ入り日本語学習を始めた時期でもあった。そこで日本人から陶質土器を譲り受けるような機会があった状況を、想定し難い。むしろ、誰かが陶質土器高坏を、江坂氏父に長野県大島村の古墳出土品として譲渡し、さらに日本考古学研究所関係の誰か―江坂氏を、名前を記すことなく名字だけで江坂氏を誰か特定でき、その方の父親に父上という敬語を付けて呼んでいた人物―が入手し、上の情報とともに日本考古学研究所保管となった、というのが一番考えられる経緯である。日本考古学研究所内では、主たる調査対象でもあった縄文土器に限らず、他の遺物の展観もされていた記録があり、この陶質土器もそういった目的のために保管されるようになったのかもしれない。先の島根県の場合と同様、想定できる入手経路を図9に模式図的に示してみたが、そこでいう②の場合である[22]。



※実線で示したものが、想定される経路の例。
※数字は、その出来事が起きたときの西暦年（幅が想定される場合には期間）。
①は、江坂氏の父が自ら入手した陶質土器の場合。
②は、江坂氏の父が第三者から陶質土器を入手した場合。

図 9　旧大島村所在古墳出土とされる陶質土器の収蔵過程模式図

3. 朝鮮半島出土の可能性が高い陶質土器

やはり前稿（木村 1987）で陶質土器として紹介したものである。ただ、前稿でもふれたように、類例としてよい出土品を見出せなかったことには変わりがない。

今回あらためて類例を探してみたが、やはり自信をもって類例だと提示できるものはなかった。ただ、胎土、製作技法、焼成、それに伴う色調等は、陶質土器の範疇に入れても問題はないものと考えている。

(1) 把手付短頸壺[23]　No. 10-497（図 10-1）

従来、コップ型土器、把手付盌など各種の名称が用いられれている器種ではあるが、ここでは、暫定的に把手付短頸壺を用いる。

口径 6.6cm、底径 6.9cm、器高 7.3cm を計る。平底からふくらみ気味に立ち上がり、扁球系の胴部で中央に最大径がくる。頸部はやや内傾して口縁に至り、端部を丸くおさめる。胴部外面は、全体に回転横ナデ調整をした後、ヘラ状工具で斜め方向に短い沈線を刻んでいる。内面には、時計回りのロクロ回転の稜がナデを施されず明瞭に輪郭が残っている。底部外面はヘラ削りにより平底をなす。削られたままの底部から立ち上がりに鋭い稜を形成している。把手は、粘土紐をらせん状に撚ったものを円環状に作り、胴部中央に貼り付けている。胎土は、やや粗めである。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

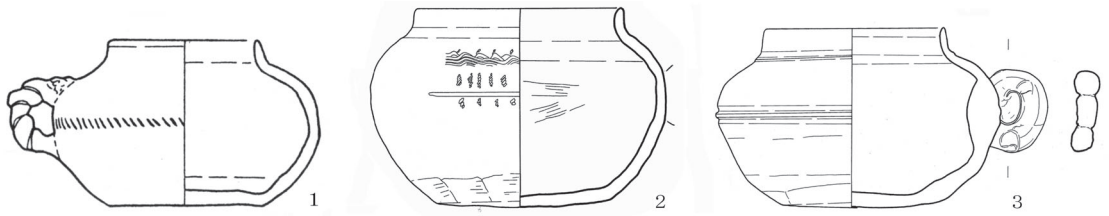
ここまでが前稿（木村 1987）の観察結果であった。今回あらためて、この土器の観察結果を、酒井清治氏により私信を通じて筆者の不十分な観察を補填していただくことができた。酒井氏の的確な表現を引用させていただくと、「把手は本体に対して二本の太さが異なり、表面の整形も胴部と比較して粗く、接合部も篦のあとが残るなど、あまりにも稚拙で」ある。

「胴部にしても把手」が付く側へ「ナデが不整形に見られ、ロクロ整形を行いながらこのようなナデをする意味が」計りかねる。「同様に刻線文も間隔が不均等で、上下に振れるなど稚拙で」ある。また、「口縁部が黒くなっているのは蓋を被せて焼成した」ためである。全体的にみて、「胴部のロクロ成形が良いのに把手や施文が稚拙で」あるといった点がある。

結論からいうと、器形だけでなく外面装飾（施文）が一致する類例は、管見では見出せなかった。短頸壺本体が同様の器形をとるものは、高霊池山洞古墳群中の複数の石槨墓から出土しており、うち 2 点を図 10 に示してみた。なお、図 10 の 2 は、図示はしていないが蓋を伴う。館蔵品と器形の特徴は共通する。図示したような池山洞古墳群出土品と館蔵品が大きく異なる点は、把手の形状である。図 10 の 3 をみてもわかるように、池山洞古墳群出土品の把手は、ひも状に伸ばした粘土を渦巻状にして円板状に作り、短頸壺本体へと押着している。把手の内部は指を入れる隙間もなく、把手というよりもつまみの機能をもつといった方がよいかもしれない。他方、館蔵品は把手の中央に空間があり、把手としての機能をもっている。

ほかにも、図示しなかったが、胴部と頸部の接合面あるいは胴部外面に突帯を 2 ～ 3 条削り出して作っていたり、胴部中央最大径をとる付近に櫛状工具による波状文が施されていたりするものがほとんどで、館蔵品のように斜め縦方向に短い沈線を巡らすものは見出せなかった。唯一列点文を施していたものが図 10 の 2 である。

胴部下半は、館蔵品はナデ調整が底部外面以外全体に及び、底部のみヘラ削りされて完全な平底を呈していないが、池山洞古墳群出土品のほとんどは、胴部下



1．館蔵品（№10-497）　2．高霊 池山洞128号石槨墓　3．高霊 池山洞125号石槨墓
（2，3は嶺南文化財研究院調査）

0　10cm

図 10　館蔵品とその類例 5

半からヘラ削りが始まっている点も大きく異なる。図10の2は縦方向、3は横方向にヘラ削りの痕が残っている。

さらに、ほかの器種でも、館蔵品のようにヘラ状工具で斜め方向の短い沈線文を刻む例は見出せなかった。

こうした状況からは、短頸壺部分の器形からみて館蔵品も高霊地域様式土器の影響のもと作られたとも考えられるが、確言できない。高霊地域様式土器が作られた時期に並行する他地域の土器にも類例をもとめることができなかったからである。場合によっては、嶺南地方以外の地域、あるいはもっと新しい時期のものの可能性がある。ただ、上述の類例が出土したのは池山洞古墳群の場合、先述のように石槨墓からであった。仮に高霊地域様式であるならば、石槨墓で共伴する他の有蓋長頸壺、蓋などの陶質土器は、白井氏のいうIC期～IIA期になる（白井2003a）ものがほとんどになり、把手付短頸壺も年代的には5世紀後半代になると考えられる。館蔵品の場合それに比して技術的に退歩している面が強いので、強いて年代を求めれば、6世紀以降新羅後期様式土器の影響が洛東江西岸に及ぶ前、になる可能性が高い。

結論

ここまで、筆者がかつて資料紹介を行った考古資料のうち、南山大学人類学博物館所蔵の陶質土器について再び現在までの知見をもとに、筆者なりに再評価してみた。館蔵品には、人類学博物館に登録されるにあたっての記録、あるいは詰め込まれた紙片が伴っている。しかし表2をみてもわかるように、筆者なりに今回、あらためて実物を観察し直した結果、そのまま肯定できるものとそうでないものの判断をつけることができたのは事実である。内容は表2のように一覧表にしたとおりである。

ここで筆者がかつて、この館蔵品を陶質土器として紹介した南山大学人類学博物館館報のなかの一部を改変の上引用させていただく。

表2　考察結果一覧

器種	博物館登録番号	登録上の出土地	筆者推定出土地	（暦）年代	博物館側の記録等	備考
短頸壺	10-594	平壌附近	平壌附近 楽浪郡 故地	1世紀初	朝鮮楽浪出土漢代壺（注記） 朝鮮平安北道平壌附近／楽浪遺跡発掘／土器 （以上3行縦書き紙片あり）	
有蓋椀	10-496	慶州	慶州	7世紀末～8世紀初		蓋と椀1組
高坏	3-134	島根県（旧）法吉村	慶州／東萊	5世紀中葉	（現）松江市 ヒノサン山横穴墓9号 1949年9月18日	蓋を伴わず
有蓋高坏	3-147	長野県（旧）大島村	陜川／高霊	5世紀中葉	（現）下伊那郡松川町 所在古墳 1931年7月15日　江坂氏父上から	蓋
	3-148					高坏
把手付短頸壺	10-497	－	高霊か	6世紀？		類例は器形のみ

※博物館登録番号の左側の数字は登録時の整理の際に附番されたもので、当時の判断により、3は日本国内出土品、10は海外出土品を意味する。

「現在、日本国内には、朝鮮半島より将来された各種の文化財が所在する。このなかには、明治時代以降第二次世界大戦前（19 世紀後半から 20 世紀前半）にかけて、日本にもちこまれた、いわゆる考古資料も数多くある。そのような考古資料と呼べるものは、出土地、出土状態などの情報が不明で、遺跡から遊離したものが多いようである。しかし、最近の半島における考古学調査の進展や、主として半島南部出土陶質土器の地域差とそれに基づく編年作業、さらには地域相互の交差編年研究によって、出土地不明の遺物についても、ある程度出土地、さらには年代についても推測が可能となってきた。

この現状をふまえれば、上述の考古遺物を本格的な研究の対象として、再検討すべき時期にきているようである。」（小田 1985）

ここまで「　」で引用した点については、今も変わらない思いである。ただ、上で述べた「推測」の部分は、今や「同定」と言い換えてもよい段階に達していると考えている。

とはいえ、今回の筆者なりの再評価でもそれで定まったものとは考えていない。1 の短頸壺、4 の把手付坏は確実な類例というものを見出せなかったし、3 の有蓋高坏は新たな地域差の可能性を示唆するものにもなった。こういった点は、まだまだ今後追求できる部分であり、言い換えれば遺跡から遊離した資料であっても、逆説的ではあるが遺跡から遊離しない確実な資料の正確な解釈に資するものになる可能性を示すことができたのではないか、という実例になればよいと思っている。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、さまざまな方々、機関よりご教示を賜りました。なかには、筆者の不躾な質問に対し、誠実なご対応いただいた方も少なからずいらっしゃいます。本当にありがとうございました。ここにご芳名を記させていただき、感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

伊藤蔵之介　亀田修一　黒澤浩　酒井清治　櫻井秀雄　定森秀夫　中里信之　中村潤子　朴成南　松尾充昌　吉松優希　米山梓　領塚正浩　（五十音順、敬称略）

南山大学人類学博物館　南山大学人類学研究所　島根県立出雲古代歴史博物館　島根県古代文化センター　長野県歴史館　長野県飯田市教育委員会　長野県下伊那郡松川町教育委員会　とりわけ、南山大学人類学博物館の皆様には、煩雑な質問に迅速かつこちらの意図を汲んだ正確な回答をいただき、また、調査にあたっての許可もいただき、本当にありがとうございました。

注

(1) 館蔵品に付された No. は、博物館の登録番号である。以下の館蔵品の場合も同じ。なお、前稿（木村 1987）では、個々の土器の説明のなかで、慶州出土のラベル、注記があった旨記述しているが、あらためて土器を観察し直した際には、そういったラベル、注記は施されていなかった。筆者の誤記であり、ここで訂正させていただく。

(2) 石厳里 9 号は 1916 年、小川敬吉により発掘調査が行われ、1925 年から 1927 年にかけて調査報告書が刊行されている（関野・小川ほか 1925、1927）。さらに韓国国立中央博物館に保管していた遺物、調査記録の再整理が行われ、2018 年になって再整理報告書も公刊されている（이나경（イナギョン） 2018）。

(3) 2010 年から 2011 年にかけて、中国延辺大学渤海史研究所と朝鮮社会科学院考古学研究所によって共同調査された木槨墓 12 基のうちの 1 基になる。

(4) 梧野里古墳群については、図譜刊行後 1930 年になって、野守健、榧本亀次郎、神田惣三によって発掘調査が行われ、楽浪時代の木槨墓群であることが明らかになっている（野守・榧本・神田 1935　有光 1987）。

(5) 新羅が最終的に朝鮮半島の中～南部ほぼ全域を政治的に統一する少し前、6 世紀後半以降に出現する陶質土器様式で、新羅中枢がおかれた慶州を中心に出土する。器面に印花文が施文されることが特徴だが、それ以前の三国時代の陶質土器とも器種構成も含め大きな変化が生じている。統一新羅様式等研究者により名称の統一が必ずしもなされていないが、本稿では、朴成南氏の研究史の整理（朴成南 2022：6 頁以下）に基づく、新羅後期様式土器の名称を用いる。

　なお、本文中で言及する皇南洞古墳群は、三国時代における新羅の中心古墳群で、構成する古墳（積石木槨墓）のなかには、王陵も含まれる。

(6) 朝鮮半島の三国時代、538 年から 660 年にかけて百済の中枢がおかれた場所、当時は泗沘といった。新羅・唐の連合軍により陥落し、その政治的支配のもとにおかれた。百済によって、当地に建立されていた定林寺の石製五重塔初層四面には、唐軍により「大唐平百済国碑銘」が後刻されている。

(7) 趙榮濟氏、白井克也氏の提唱どおり、本稿でも器面を切開する技法によるものを透窓と表記する（趙榮濟 1988：255 頁、白井 2003：2 頁）。

(8) 福泉洞古墳群は、遺構、遺物からみて東萊地域の中心古墳群と位置付けることができる。釜山市街地の北東、東萊地域に所在する丘陵稜線から斜面一帯に、規

模を異にする木槨墓、石槨墓が占地し、なかには主−副槨式をとるものあった。20 世紀後半から、東亜大学校博物館、釜山大学校博物館により発掘調査が行われ、鉄製品を中心に豊富な副葬品が出土した。釜山広域市により現地に（現）福泉博物館も開設され、博物館による発掘調査も行われている。

(9) 本文中でもふれたように、陜川はかつての伽耶諸国の一つ、多羅国中枢がおかれた地で、玉田古墳群はその中心古墳群にあたる。東流する洛東江支流、黄江（フォアンガン）北岸丘陵上に立地する。20 世紀後半に慶尚大学校博物館により発掘調査が行われ、木槨墓から石槨墓や外護列石をそなえる巨大な高塚古墳、石室墓をもつ高塚古墳へと継続して首長層の墳墓が営まれていたことが判明した。出土遺物には、ローマンガラスを含め威勢品も多く、また、鉄製品も豊富に出土している。

(10) 1946 年に設立された日本考古学研究所は、1952 年に考古学研究所と改称された（領塚 2019）。したがって 1958 年の移管は、厳密にいえば「考古学研究所」からの移管となる。本文中では 1952 年より前の事項については、日本考古学研究所の名称を使っている。また、受入先も、正確にいえば南山学園であり、当初は人類学民俗学研究所になり、その後現在の人類学博物館に収蔵されるにいたった（領塚 2019）。図 5、図 9、表 4 についてはその点を反映させている。

(11) 写真撮影が行われた際に、ここで検討している陶質土器が撮影対象から外された、ということは、当時の段階で、何らかの違和感、ひのさん山横穴群出土品でない可能性をもったことからかもしれない。これはあくまでも筆者の推測である。撮影の翌年に行われた、手書きリスト（古市 1976）の再整理（コンピュータへの入力、電子化）にあたっても、この陶質土器は入力されていない。

なお。ほかにも手書きリストにあって、撮影、入力がされていない遺物があったが、それは単なる入力漏れの可能性が高い。

(12) ひのさん山横穴群の現況について、実地踏査を果たせないでいるが、本文中の 1967 年の宅地造成の際、調査されて滅失（前島 1982）とされている。しかし 9 年後の遺跡地図による遺跡の現況には 30 穴以上、3 分の 2 以上消滅（松江市教育委員会 1991：174 頁）と相違がある。松江市内の遺跡調査報告書のいくつかには、（例えば、瀬古涼子 1993：第 1 表）この『遺跡地図』の記載がもっぱら引用されている。さらに、『法吉村誌』には、「約 36 の横穴、28 が破壊」（内田 1988：15 頁）ともある。結果的に、正確な残存状況を確認できないでいる。

ただ、本文中でもふれているように、発掘調査は、山本清、近藤正両氏によるもの以外はデータベースに登載されていない（ただし、データベース上でも調査年時は空欄である）。

(13) 島根古代文化センター、吉松優希氏のご教示による。

(14) この点も吉松氏にご教示を得た。

(15) ここまで、ひのさん山横穴群に対する調査成果に関し、横穴墓が調査対象になったという前提で記述を進めてきたが、島根県遺跡データベースには登載されていないものの、「方墳を主流とし、須恵器は山陰 II 期まで、多くの場合丘陵の斜面に横穴墓をともなう」ひのさん山古墳群が存在する（石倉諒一ほか 1979：14 頁）という記載がある（下線部筆者）。これが正しければ、横穴墓群以外に群集墳も存在したことになる。南山大学人類学博物館館蔵品は「○○号墳」出土とあり、本文中でふれた『須恵器大成』で紹介された須恵器も「4 号墳」とある点、さらに同じく本文中でふれた島根大学総合博物館がホームページ上に公開しているひのさん山横穴群出土遺物のうち、直刀は「ヒノサン古墳」出土と表示されている点も、今後詳しく検討すべき余地を残している。

(16) ちなみに 1949 年のひのさん山（ヒノサン）横穴群への調査が、誰によって行われたかについて、まず一義的には日本考古学研究所である可能性を考えるべきであろう。確かに、日本考古学研究所は北関東以外でも愛知県西志賀遺跡で調査を実施している。ただ、1949 年当時の千葉県市川と島根県のあいだの交通・通信事情、北関東の縄文時代の遺跡調査が中心の日本考古学研究所が、古墳時代後期の横穴墓を調査対象にする理由などを勘案すると、可能性は低いと考えている。

(17) 初出の館報（木村 1987）では誤植で 9.8cm と報告していたが、誤りで、ここに訂正する。

(18) 高霊はかつて所在した伽耶諸国の一つ、大加耶中枢の故地であり（東・田中 1989：222−223 頁）、池山洞古墳群はその中心古墳群にあたる。現在の高霊邑北西の、比較的急峻な丘陵上に古墳が分布する。20 世紀前半には存在が知られており、一部、日本人研究者によって発掘調査が行われている。発掘調査が本格化したのは 20 世紀後半からであり、慶北大学校博物館をはじめ様々な機関により、21 世紀以降も発掘調査が行われている。大規模な高塚古墳も存在し、なかには大加耶の王陵も含まれている。

(19) 池山洞古墳群で比較対象にしたのは、73 ～ 75 号墳、嶺南文化財研究院調査区域内の石槨墓出土品（標本数 55）である。玉田古墳群は 23 号、35 号（盗掘坑）出土品（標本数 28）である。表 3 を参照されたい。

(20) 本稿では、松川町を含む下伊那郡、飯田市域を長野県の一般的な地域区分の南信地域と表記する。行政的に言えば、長野県南信州地域になる。なお、南信地域という場合、上伊那、諏訪の各地方も含む地理的概念である。

(21) 南信地域、下伊那地方においては、大和政権との

表３　池山洞古墳群と玉田古墳群の統計処理データ一覧

	出土遺構		A 坏口径（直径） cm	B 坏内面深 cm	B／A	図面番号	遺物番号
1	高霊池山洞古墳群	嶺南文化財研究院調査石槨墓 1号	14.5	4.9	0.34	5	3
2		3号	12.3	3.5	0.28	16	1
3			12.7	3.2	0.25	16	2
4			12.3	3.5	0.28	16	3
5		6号	13.4	3.8	0.28	38	1
6			13.2	4.4	0.33	38	4
7		18号	14.4	3.0	0.21	65	1
8		32号	12.8	3.9	0.30	99	1
9			13.1	4.6	0.35	99	2
10			13.1	3.5	0.27	99	3
11			13.7	4.6	0.34	99	4
12		36号	14.9	4.6	0.31	111	1
13			14.2	4.6	0.32	111	2
14		40号	12.1	3.3	0.27	15	2
15		76号	12.4	2.6	0.21	111	1
16			12.1	3.5	0.29	111	2
17			12.5	3.3	0.26	111	3
18			12.0	2.4	0.20	111	5
19		81号	11.6	2.6	0.22	121	1
20			12.1	3.0	0.25	121	2
21			14.3	4.4	0.31	121	3
22			12.3	2.7	0.22	121	4
23		84号	11.7	3.4	0.29	128	9
24		85号	11.3	2.6	0.23	128	10
25		98号	11.8	3.3	0.28	24	1
26			11.4	3.1	0.27	24	2
27		107号	11.9	2.9	0.24	36	1
28			11.4	2.4	0.21	36	2
29		124号	12.2	3.6	0.30	73	1
30			11.0	3.6	0.33	73	2
31			12.0	3.3	0.28	73	3
32			12.4	3.9	0.31	73	4
33		127号	11.3	3.6	0.32	87	1
34			12.5	3.0	0.24	87	2
35		129号	12.8	2.9	0.23	92	1
36		140号	11.3	2.6	0.23	115	3
37			12.0	2.7	0.23	115	4
38		73号 主槨	13.2	3.4	0.26	28	1
39			12.1	2.7	0.22	28	2
40			13.0	3.5	0.27	28	3
41			13.0	3.5	0.27	28	4
42			12.7	3.5	0.28	28	5
43			12.1	3.6	0.30	28	6
44			12.8	3.6	0.28	29	7
45			12.2	3.5	0.29	29	8
46			12.6	3.7	0.29	29	9
47			13.6	3.8	0.28	29	10
48			14.0	3.8	0.27	30	18
49		73号 副葬槨	12.5	3.8	0.30	49	326
50			12.4	3.8	0.31	49	327
51		74号 周辺第4号墓	12.8	2.6	0.20	111	610
52			12.9	2.7	0.21	111	611
53			12.6	1.9	0.15	111	612
54		74号 周辺第6号墓	12.8	3.8	0.30	117	639
55			13.3	3.5	0.26	117	640

	出土遺構		A 坏口径（直径） cm	B 坏内面深 cm	B／A	図面番号	遺物番号
1	陜川玉田古墳群	35号 盗掘坑	14.4	3.1	0.22	69	173
2			14.1	3.1	0.22	69	174
3			14.4	3.4	0.24	69	175
4			14.4	3.1	0.22	69	176
5			14.6	3.1	0.21	69	177
6			11.1	4.8	0.43	69	178
7			11.2	4.7	0.42	69	179
8		23号	11.3	4.2	0.37	7	11
9			11.5	4.5	0.39	7	12
10			11.9	4.5	0.38	7	13
11			11.9	5.0	0.42	7	14
12			11.9	3.5	0.29	7	15
13			12.8	5.0	0.39	7	16
14			12.7	4.8	0.38	8	17
15			12.6	4.5	0.36	8	18
16			12.5	5.1	0.41	8	19
17			12.0	4.3	0.36	8	20
18			12.0	4.8	0.40	8	21
19			11.9	4.8	0.40	8	22
20			12.7	4.8	0.38	9	25
21			12.4	4.8	0.39	9	26
22			12.2	4.2	0.34	9	27
23			12.1	4.7	0.39	9	28
24			12.4	4.5	0.36	10	29
25			12.6	4.4	0.35	10	30
26			13.2	4.7	0.36	10	31
27			12.6	3.8	0.30	10	32
28			13.2	4.1	0.31	10	33

※データの出典　（報文もしくは図面上の実測値）

池山洞古墳群

1～13　朴升圭・金昌億 ほか 2004

14～24　朴升圭・河眞鎬 ほか 2006a

25～37　朴升圭・河眞鎬 ほか 2006b

38～55　曺永鉉 2012

玉田古墳群

1～7　趙榮濟・柳昌煥・河承哲 1999

8～28　趙榮濟・柳昌煥・李瓊子 1997

※Ｂ／Ａについて（小数点第2位四捨五入）

池山洞古墳群

標本数55　中央値0.2695　標本標準偏差0.042

玉田古墳群

標本数28　中央値0.3461　標本標準偏差0.0667

★報文に記載のない数値は、図面上から換算したものである。したがって、mm単位の誤差を含む。

★この数値をもとにＢ／Ａの分散分析（Ｔ検定）を実施したところ、5%の水準で、池山洞古墳群出土品と玉田古墳群出土品のあいだに統計的に有意な差がみられた。

分析にあっては以下のサイトを利用した。

https://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/　（2023, 12.29　アクセス）

表４　ひのさん（ヒノサン）山横穴関連資料一覧

調査年次等		調査者等	内　容		出土遺物等	備　考	補注
1948（昭和23）	10/10	八東郡法吉村が松江市に編入される					
1949（昭和24）	4/14	不明 (日本考古学研究所？)	**発掘調査？**	1号墳	須恵器（坏）	ヒノサン横穴群 八東郡法吉村比之（博物館の記録） ※島根県側では、この調査に関する資料は未発見。	①
	8/20			6号墳	須恵器（蓋、坏、高坏２、平瓶、提瓶2）		
	9/14-15			8号墳	須恵器（蓋、坏、甕）、土師器(壺)		
	9/18			9号墳	須恵器（蓋7、坏7、高坏、横瓶）、**陶質土器**（高坏）		
				出土遺構不明	須恵器（坏）、土師器（高坏）		
					須恵器（蓋、器種不明品）	この2点は記録のみ。所在不明。	
					鉄器13、木炭一括ほか	(愛知）県埋文へ移管という記録あり。	
1950（昭和25）	2/4	山本清	発掘調査	1号横穴	須恵器（高坏）	遺構・遺物実測図	②
				5号横穴	須恵器（甕）	遺構・遺物実測図	
	2/4、5月			6号横穴	須恵器（高坏、甕）	遺構・遺物実測図	
				出土遺構不明	土師器（高坏）	遺物実測図	
1958（昭和33）		―	出土遺物の**移管**		1949年出土遺物	考古学研究所（千葉県市川市）から南山学園へ	①
1962（昭和37）		山本清	論文引用		須恵器・遺構形式	おそらく1950年の調査成果を反映。	③
1967（昭和42）		山本清 近藤正	発掘調査	4号横穴	鉄刀	宅地造成に伴う緊急発掘。遺物実測図、地形測量図、工事図面(追記あり）。 遺跡は滅失という記述	④ ⑤ ⑥
				24号横穴	須恵器（甕）、土師器（高坏、器種不明品）、鉄刀		
				26号横穴	須恵器（蓋坏、高坏２、短頸壺）、土師器（高坏、甕）		
				27号横穴	須恵器（高坏）		
				出土遺構不明	鉄刀	遺物実測図	④
				西１群第１号？	人骨２体	記述のみ	⑦
1976（昭和51）		古市保子	**整理１**　台帳作成		1949年出土遺物		⑧
1980（昭和50）		松江市 教育委員会	遺跡の現況に関する情報		約36の横穴、28が破壊	法吉村誌引用の松江市教育委員会社会教育課文化財係資料　による。	⑨
1981（昭和56）		田辺昭三	4号墳出土遺物紹介		須恵器（高坏、直口壺）	八雲立つ風土記の丘資料館 邑南町教育委員会管理	⑩
1986（昭和61）	以降	松江市・ 島根県 教育委員会	遺跡の現況・出土遺物の情報（発掘調査報告書の中に引用）		遺跡の3分の2程度が破壊。 横穴の数は26～30 須恵器、土師器、刀、刀子、人骨	1967年の調査結果をうけてのものか？ 横穴の数は報告書により幅がある。 出土品内容は報告書により一部異なる。	⑪
1987（昭和62）		桑原真治 他	**遺物集成作業**		島根県域出土の陶質土器 他		⑫
1991（平成３）		松江市 教育委員会	松江市遺跡地図へ登載		横穴墓 遺跡番号K017 地図番号N-49	1986年以降の遺跡現況を踏襲	⑬
1995（平成７）		人類学博物館	**整理２**　撮影		1949年出土遺物（大部分の須恵器）	アルバム作成	
1996（平成８）		人類学博物館	**整理３**　報告作成（中断）		1949年出土遺物	リストの入力（電子化）、(一部の遺物の）実測、トレース、レイアウト、文章作成。	
2020（令和２）		人類学博物館	**整理４**　リスト作成		1949年出土遺物	再度、遺物リストを作成。	
2022（令和４）	12/16	島根大学 総合 博物館	「横穴」出土遺物 Home Page上に公開		土師器（高坏） →陳列用遺物箱№8	考古学研究室管理	⑭
			「古墳」出土遺物 Home Page上に公開		直刀 →陳列用遺物箱№100	写真（画像）なし。 考古学研究室管理	⑮
2023（令和5）		松尾充昌	**遺物集成作業**		山陰西部地域出土の陶質土器 他		⑯

補注（ゴシック体の部分は館蔵陶質土器に関する項目）

① 秦優莉香 2022　領家 2019。本文中、注 9 も参照のこと。
② 「山本考古資料」AY-3　島根県古代文化センター吉松優希氏のご教示による。
③ 山本清 1962。
④ 「山本考古資料」R-22（島根出雲歴史博物館 2010）、島根県古代文化センター吉松優希氏のご教示による。
⑤ 島根大学地域貢献委員会 2004. 2005　ただし調査年年次は空欄。
⑥ 前島己基 1982。
⑦ 『松江考古学談話会資料』にあるとのこと、島根県古代文化センター　吉松優希氏のご教示による。
⑧ 古市保子（編）1976。
⑨ 内田映 1988
⑩ 田辺昭三 1981、参考図版 157、163。管理者情報は⑤による。
⑪ （管見では）丹羽野裕 1986、が嚆矢。
⑫ 桑原真治ほか 1987。※ただし、ひのさん山出土とされる陶質土器は含まれていない。
⑬ 松江市教育委員会　1991。
⑭ 島根大学総合博物館アシカル 2011。ただし博物館への収蔵年次は空欄。
⑮ 島根大学総合博物館アシカル 2011。ただし博物館への収蔵年次は空欄。
⑯ 松尾充昌 2023。　※ただし、ひのさん山出土とされる陶質土器は含まれていない。

関係のもと、5 世紀後半に初期馬具と考えるものが出土する。よく知られている事例が、飯田市の新井原遺跡 4 号土壙や宮垣外遺跡出土の f 字形鏡板付轡、剣菱形杏葉などである（岡田 2006：78 頁　豊橋市美術博物館 2011：52-53 頁）。剣菱形杏葉は、偏円部と剣菱部の境界に区画線がない、剣菱形杏葉でも古い型式である。轡も立聞を上に向けたときに銜の外環が横を向く、諫早氏のいう B 類（諫早 2012：22 頁）にあたる。朴天秀氏が大伽耶製と判断したものであり、こういった馬具が高霊（大伽耶）で出現するのは、諫早氏の編年でいえば、大伽耶 III 段階になり（諫早 2012：189 頁）、暦年代でいえば 5 世紀末から 6 世紀とされている。若干年代観に差があり、日本側が古い点に再検討が必要であるが、いずれにせよほとんど時期差がなく下伊那へもたらされたものとみることができる。

同様に、百済土器も百済で製作されたものがきており（長野県埋蔵文化財センター飯田支所 2023）、土器という遺物の性格上、それほどの時間差をおかずもたらされたものと考えるべきであろう。

(22) ここでいう「江坂氏父上」について、当時江坂氏とだけで、名前を書かなくても誰かわかる存在で、その父に対し父上と敬語をつかっている点から、日本考古学研究所の評議員であった江坂輝彌氏を、候補の一人としてあげることもできるかもしれないが、現在においては不明であるといわざるをえない。

ちなみに、本文中でもふれた松川町教育委員会からは、江坂という苗字は、松川町在地の苗字ではない、という回答もいただいている。

(23) 前稿（木村 1987）では把手付坏としていたが、酒井清治氏のご教示のとおり、胴部の器形から把手付短頸壺という名称が適切と考え、以下この名称で表記する。なお本文中で引用した高霊池山洞古墳群の出土品の場合、調査報告書（朴升圭・金昌億ほか 2004　朴升圭・河眞鎬ほか 2006a、2006b、2006c、2006d）では、把手付壺という名称で報告している。

図および表　目次・出典

図 1　本文中で言及する遺跡の位置
筆者作成。

図 2　南山大学人類学博物館館蔵品とその類例 1
1、木村 1987：第 1 図-1　2、이나경 2018：図面 37　3、鄭永振・李東輝・鄭京日 2014：図 11-1

図 3　南山大学人類学博物館館蔵品とその類例 2
1、木村 1987：第 1 図-5　2、金正基・趙由典ほか 1984：挿図 35　3、金正基・趙由典ほか 1984：挿図 18　4、国立慶州文化財研究所 2009：図面 12-①　5、金元龍・趙由典ほか 1990：図面 37-3　6、李熙濬 1994：図 1-5　7、李熙濬 1994：図 1-2　8、秦弘燮・金正基ほか 1985：図面 44-1

図 4　南山大学人類学博物館館蔵品とその類例 3
1、木村 1987：第 1 図-2　2、宋桂鉉・河仁秀ほか 1993：図面 28-1　3、金斗喆・安星姫ほか 2016：図面 47-160　4、李殷昌 1976：図版第 19-②左下　5、趙榮濟 1996：図 7-57　6、宋義政・孫明助ほか 1990：図面 157-②

図 5　ヒノサン山横穴出土とされる陶質土器の収蔵過程模

式図
筆者作成。
図 6　『須恵器大成』所収　ヒノサン 4 号墳出土須恵器
田辺 1981：参考図版 157、163
図 7　南山大学人類学博物館館蔵品とその類例 4
1、趙榮濟・柳昌煥・李瓊子 1997：図面 12-45　2、朴升圭・河眞鎬ほか 2006c：図面 147-5　3、趙榮濟・柳昌煥・李瓊子 1997：図面 7-12　4、木村 1987：第 1 図-3　5、趙榮濟・柳昌煥・河承哲 1999：図面 69-175
図 8　旧大島村所在古墳出土とされる陶質土器の収蔵過程模式図
筆者作成。
図 9　大坪古墳出土高坏
市村 1955a：図版第二-7
図 10　南山大学人類学博物館館蔵品とその類例 5
1、木村 1987：第 1 図-4　2、朴升圭・河眞鎬ほか 2006b：図面 90-2　3、朴升圭・河眞鎬ほか 2006b：図面 81-1

表 1　旧大島村域で須恵器が出土した記録のある古墳一覧
市川 1955a、1955b、長野県 1981 をもとに筆者作成。
表 2　考察結果一覧
筆者作成。
表 3　池山洞古墳群と玉田古墳群の統計処理データ一覧
表中に記載した報告書をもとに筆者作成。
表 4　ひのさん（ヒノサン）山横穴関連資料一覧
表中に記した資料をもとに筆者作成。

参考・引用文献

※著編者日本語読み五十音順。
※原典表記の漢字は原則常用漢字へ変換している。
※文献の末尾に（中）とあるものは中文、（韓）とあるものは韓国語によるもの。

東潮・田中俊明　森浩一（監修）　1989『韓国の古代遺跡 2 百済・伽耶篇』中央公論社。
有光教一　1987『朝鮮考古資料集成　十八・十九・二〇・二一・二二巻　補巻一・二・三・四・五・六巻解説』出版科学総合研究所。
諫早直人　2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣。
石倉諒一　東森市良　内田律雄　柳浦俊一　1979『土井 13 号墳発掘調査報告書』八雲村教育委員会。
市村咸人　1955a「第四章　各地区古墳の様相　第一節　飯田盆地龍西北部　一　大島村」『下伊那史第三巻　原始時代　下』下伊那誌編纂会、151-171 頁。
1955b「下伊那古墳地名表　飯田盆地龍西北部　1 大島村」『下伊那史第三巻　原始時代　下』、下伊那誌編纂会、741-742 頁。
1955c「新旧古墳名対照表」『下伊那史第三巻　原始時代　下』下伊那誌編纂会、1116-1119 頁。
이나경　2018『平壤　石厳里 9 号墳　日帝強占期資料調査報告 30 輯』国立中央博物館。（韓）
岩崎卓也　1988「3　古墳時代の信仰と墓制　(4)埋葬施設」『長野県史　考古資料編　全 1 巻第 4 冊　遺構・遺物』長野県史刊行会、893-899 頁。
内田映　1988『法吉村誌』発行者不明。
大島村誌編纂委員会　1956『大島村誌』大島村役場。
大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11 号、島根考古学会、39-82 頁。
岡田正彦　2006「南信州の渡来文化―古墳時代を中心として―」『研究紀要』16 号、飯田市立美術博物館、61-88 頁。
小田富士雄　1985「伽耶土器―新出の作品をめぐって」『九州古代文化の形成　下（歴史時代・韓国篇）』学生社、419-433 頁（初出 1981）。
亀田修一　2023「古墳時代の山陰と朝鮮半島」『先史・古代の日韓交流の様相―山陰を中心として　第 50 回山陰考古学研究集会資料集』第 50 回山陰考古学研究集会事務局、22-69 頁。
木村光一　1987『報第 23 号　本館所蔵朝鮮半島出土陶質土器について』南山大学人類学博物館。
2007a「南山大学人類学博物館所蔵　伝半島将来金属製品について」『南山考人』第 35 号、南山大学考古文化人類学研究会、35-51 頁、。
2007b「帯金具について―南山大学人類学博物館所蔵品の紹介と考察」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』、伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会、229-272 頁。
金赫中　2016『慶州　金冠塚（遺物篇）　日帝強占期資料調査報告 23 輯』、国立慶州博物館。（韓）
金元龍　1960『新羅土器의研究　博物館叢書　甲第四』乙酉文化社。（韓）
金元龍・趙由典ほか　1990『慶州　龍江洞古墳発掘調査報告書』文化財研究所・慶州古蹟発掘調査団。（韓）
金正基・趙由典ほか　1984『皇龍寺　遺蹟発掘調査報告書 Ⅰ』文化財管理局・文化財研究所。（韓）
金鍾徹　1981『高霊池山洞古墳群　32 ～ 35 号墳・周辺石槨墓　遺蹟調査報告第 1 輯』啓明大学校博物館。（韓）
金斗喆・安星姫ほか　2016『福泉洞古墳群Ⅷ―4・7・12・13・30 号墳―　研究叢書第 42 輯』釜山大学校博物館。（韓）
桑原真治・村上勇・川原和人・昌子寛光・宍道年弘・片岡詩子・平野芳英　1987「島根県」『第 21 回埋蔵文化財研究会・第 4 回調査研究会　弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題第Ⅱ分冊　中国・四国・近畿・中部以東編』大阪府埋蔵文化財協会、115-138 頁。
国立慶州文化財研究所　2009『慶州　皇南洞大形建物址

皇南洞 123-2 番地遺蹟　学術研究叢書 53』国立慶州文化財研究所。（韓）
斉藤孝正・後藤健一　1995『須恵器集成図録　第 3 巻　東日本編Ⅰ』、雄山閣。
早乙女雅博　2010『新羅考古学研究』、同成社。
酒井清治　1987「長野県」『第 21 回埋蔵文化財研究会・第 4 回調査研究会　弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題第Ⅱ分冊　中国・四国・近畿・中部以東編』大阪府埋蔵文化財協会、617-626 頁。
1994「わが国における須恵器生産の開始について」『研究報告第 57 集』国立歴史民俗博物館、265-311 頁。
笹沢浩　1988「⒅　初期須恵器の分布」『長野県史　考古資料編　全 1 巻第 4 冊　遺構・遺物』長野県史刊行会、1040-1041 頁。
定森秀夫　1999「陶質土器からみた東日本と朝鮮」『青丘学術論集』第 15 集、韓国文化振興財団、5-93 頁。
2015「第 2 章　陶質土器の地域性と編年　第 1 節　慶尚南道昌寧地域出土陶質土器の検討」『朝鮮三国時代陶質土器の研究』六一書房、23-41 頁（初出 1981）。
島根県立出雲歴史博物館　2010『山本清考古資料の公開について　山本資料公開用一覧表』（https://www.izm.ed.jp›cms›cms）島根県教育庁古代文化センター（2023.12.27 アクセス）。
島根大学総合博物館アシカル　2011『島根大学ミュージアム　島根大学標本資料類データベース』（http://museum-datadata.shimane-u.ac.jp）（2023.12.27 アクセス）。
島根大学地域貢献推進委員会　2004-2005『島根県遺跡データベース』（https://iseki.shimane-u.ac.jp）（2023.12.27 アクセス）。
白井克也　2003a「日本における高霊地域加耶土器の出土傾向―日韓古墳編年の並行関係と暦年代」『熊本古墳研究』創刊号、熊本古墳研究会、81-102 頁。
2003b「新羅土器の型式・分布変化と年代観―日韓古墳編年の並行関係と暦年代―」『朝鮮古代研究』第 4 号、朝鮮古代研究刊行会、1-42 頁。
秦弘燮・金正基ほか　1985『皇南大塚Ⅰ（北墳）発掘調査報告書』文化財研究所美術工芸研究室・文化財管理局。（韓）
関野貞　1915『朝鮮古積圖譜第 1 冊　楽浪郡時代・帯方郡時代・高句麗時代』朝鮮総督府。
関野貞・小川敬吉ほか　1925a『楽浪郡時代の遺蹟　図版篇上冊　古蹟調査特別報告第 4 冊』朝鮮総督府。
1925b『楽浪郡時代の遺蹟　図版篇下冊　古蹟調査特別報告第 4 冊』朝鮮総督府。
1927『楽浪郡時代の遺蹟　本文篇　古蹟調査特別報告第 4 冊』朝鮮総督府。
瀬古涼子　1993『伝宇牟加比売命御陵古墳　松江市文化財調査報告書第 54 集』松江市教育委員会。
曺永鉉　2012『高霊池山洞第 73 ～ 75 号墳　学術調査報告第 36 輯』高霊郡大加耶博物館・大東文化財研究院。（韓）
宋義政・孫明助ほか　1990『慶州月城路古墳群』国立慶州博物館・慶北大学校博物館・慶州市。（韓）
宋桂鉉・河仁秀ほか　1993『東萊福泉洞 53 号墳　遺蹟調査報告書第 6 冊』釜山直轄市立博物館。（韓）
高久健二　1993「楽浪墳墓の編年」『考古学雑誌』第 78 巻 4 号、日本考古学会、33-77 頁。
1995『楽浪古墳文化研究』学研文化社。（韓）
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店。
趙榮濟　1988『陜川玉田古墳群Ⅰ　木槨墓　調査報告第 3 輯』慶尚大学校博物館。（韓）
1996「玉田古墳의編年研究」『嶺南考古学』第 18 輯、嶺南考古学会、41-74 頁。（韓）
趙榮濟・柳昌煥・河承哲　1999『陜川玉田古墳群Ⅷ　5・7・35 号墳　研究叢書第 21 輯』慶尚大学校博物館。（韓）
趙榮濟・柳昌煥・李瓊子　1997『陜川玉田古墳群Ⅵ　23・28 号墳　研究叢書第 16 輯』慶尚大学校博物館。（韓）
鄭永振・李東輝・鄭京日　2014『平壌一帯的楽浪墓葬 2010 ～ 2011 年度発掘報告書』香港亜州出版社。（中）
鄭仁盛　2009「석암리 9 호분（平壌石厳里 9 号墳）」『韓国考古学専門事典古墳篇（WEB 版）』https://portal.nrich.go.kr/kor/archeologyTotalList.do?menuIdx=567）国立文化財研究所（2023.12.27 アクセス）。（韓）
鄭澄元・洪潽植ほか　1990『東萊福泉洞古墳群Ⅱ　遺蹟調査報告第 14 輯』釜山大学校博物館。（韓）
鄭澄元・申敬澈　1982『東萊福泉洞古墳群Ⅰ　図版・図面遺蹟調査報告第 5 輯』釜山大学校博物館。（韓）
1983『東萊福泉洞古墳群Ⅰ　本文　遺蹟調査報告第 5 輯』釜山大学校博物館。（韓）
豊橋市美術博物館　2011『黄金の世紀』展図録。
鳥居龍蔵　1924『下伊那の先史及歴史時代』信濃教育会下伊那部会・古今書院。
長野県　1981「1　遺跡地名表　下伊那郡松川町」『長野県史　考古資料編　全 1 巻第 1 冊　遺跡地名表』長野県史刊行会、508-517 頁。
長野県埋蔵文化財センター飯田支所　2023『川原遺跡発掘調査だより』第 3 号。
長野県歴史館　2020『長野県内の遺跡』（https://www.npmh.net›iseki）（2023.12.27 アクセス）。
丹羽野裕　1986『岡田薬師古墳調査報告書　淞北第 2 団地造成に伴う発掘調査報告書』島根県教育委員会。
野守健・榧本亀次郎・神田惣三　『平安南道大同郡大同江面梧野里古墳調査報告　昭和五年度古蹟調査報告第 1 冊』朝鮮総督府。
秦優莉香　2022「南山大学人類学博物館所蔵考古資料の現状と課題―資料番号の整理から―」『紀要』第 40 号、南山大学人類学博物館、45-54 頁。
古市保子　1976『51 年度 G 棟地下収蔵遺物移動に関する

報告Ⅰ―特に市川市寄贈遺物について―』南山大学文化人類学研究会考古サークル。
朴升圭　2006「Ⅳ．考察」『高霊　池山洞古墳群Ⅴ　学術調査報告第111冊』嶺南文化財研究院、312–327頁。（韓）
朴升圭・河眞鎬ほか　2006a『高霊　池山洞古墳群Ⅱ　学術調査報告第108冊』嶺南文化財研究院。（韓）
2006b『高霊　池山洞古墳群Ⅲ　学術調査報告第109冊』嶺南文化財研究院。（韓）
2006c『高霊　池山洞古墳群Ⅳ　学術調査報告第110冊』嶺南文化財研究院。（韓）
2006d『高霊　池山洞古墳群Ⅴ　学術調査報告第111冊』嶺南文化財研究院。（韓）
朴升圭・金昌億ほか　2004『高霊　池山洞古墳群Ⅰ　学術調査報告第70冊』嶺南文化財研究院。（韓）
朴成南　2022『統一新羅土器様式の研究』雄山閣。
朴天秀　1993「三国時代昌寧地域集団의 ` 性格研究」『嶺南考古学』第13輯、嶺南考古学会、157–207頁。（韓）
2009「5～6세기　大伽耶의　発展과　그　歴史的意義」『高霊池山洞44号墳　大加耶王陵』慶北大学校博物館・慶北大学校考古人類学科・高霊郡大加耶博物館、577–641頁。（韓）
前島己基　1982「ひのさん山横穴群」『島根県大百科事典下巻』山陰中央新報社、390頁。
松江市教育委員会　1991『松江市遺跡地図　松江市文化財調査報告書第46集』。
松尾充昌　2023「山陰西部における古墳時代の渡来系遺物」『先史・古代の日韓交流の様相―山陰を中心として　第50回山陰考古学研究集会資料集』、発行地不明、第50回山陰考古学研究集会事務局、122–139頁。
宮川禎一　1988「文様からみた新羅印花文陶器の変遷」『高井悌三郎先生喜壽記念論集　考古学と歴史学』高井悌三郎先生喜壽記念事業会・真陽社、73–94頁。
1993「新羅印花文陶器変遷の画期」『古文化談叢』第30集（下）古文化談叢発刊20周年・小田富士雄代表還暦記念論集（Ⅱ）、九州古文化研究会、505–532頁。
宮下健司　1988「1　長野県の考古学史　⑵長野県考古学史年表」『長野県史　考古資料編　全1巻第4冊　遺構・遺物』長野県史刊行会、10–27頁。
山本清　1960「山陰の須恵器」『開学十周年記念論文集人文科学篇』島根大学、48–64頁。
1962「横穴の形式と時期について」『島根大論集（人文科学）』第11号、島根大学、23–37頁。
李殷昌　1976「Ⅴ．味鄒王陵地区第10区域　皇南洞110古墳発掘調査報告」『慶州地区古墳発掘調査報告書第1輯』文化広報部文化財管理局・韓国文化財普及協会、289–390頁。
李熙濬　1994「부여　정림사지　蓮池　유적　출토의　신라　인화문토기」『韓国考古学報』第31輯、韓国考古学会、121–135頁。（韓）
李熙濬　諫早直人（訳）・吉井秀夫（解説）　2019『新羅考古学研究』、東京、雄山閣（原著2007）。
領塚正浩　2019「ヨハネス・マーリンガー神父と考古学研究所」『紀要』第38号、南山大学人類学博物館、39–52頁。

印花文拡大
（上：蓋、下：椀）

短頸壺

胴部下半ヘラ削りの詳細

有蓋椀

高坏

有蓋高坏

胴部近景

把手付短頸壺

把手接合部
近景

館蔵陶質土器

Stoneware collection of the Nanzan University Museum of Anthropology

KIMURA Koichi

This paper reexamines information about earthenwares collected by the Nanzan University Museum of Anthropology. Concerning these items, the author had reported in the museum's annual bulletin about forty years ago; at the time, they were considered stonewares originating from the Korean Peninsula. The reexamination reveals that four kinds of earthenwear - a short-necked vase, a step cup, a step cup with a cover and a bowl with a cover (six items in all) - can be identified as stonewares from the Korean Peninsula. This means that the previous identification information attached to the step cup and the cup with a cover, 'Japanese origin', should be dismissed because of low probability. Moreover, the author investigated the date and supposed location of excavation in the Korean Peninsula by following similar examples, and the date and location were almost identified. Finding similar cases concerning another item, a short-necked vase with a handle, was not easy. Still, it can be considered from the overall observation that the item would be stoneware. It is hoped that accurate identification of location and date would become possible by noticing newly excavated items.

人類学博物館のコレクション史と整理状況

井原瑠梨

はじめに

当館は1949年に人類学民族学研究所に設置された陳列室を前身とし、以来様々な資料を収集してきた。2024年9月現在の収蔵資料点数は10万点を超えている。なお、この数字は台帳上で確認できる数字であり、実際の点数は把握できていない。未整理・未登録の資料が多いことと、複数回にわたる移転に伴って資料が移動し、台帳上で所在が確認できなくなってしまった資料が多いことが要因である。台帳自体もこれまでも様々な方法で整備され、少しずつ形になってきているものの、目録やデータベース等の公開には至っていない。学術的価値の高い豊富なコレクションを所蔵していても十分な活用ができていない状況である。

本稿では、まず当館の誕生から各資料群の来歴について概観し、これまでに実施してきた整理の状況と今後の課題・展望について報告する。

1. 沿革

当館は1949年の9月に設置された、南山大学人類学民族学研究所の陳列室を前身としている。当時の研究所は、名古屋市昭和区五軒家町6番地（現：南山高等学校・中学校男子部）に所在した。1964年に南山大学が現在の山里町に移転した際に、研究所は第一研究棟へ、陳列室は図書館地下1階へと移転し、両施設は距離のうえでは分離をした形をとった。1967年に博物館相当施設としての認可を受け、1973年に図書館の3階へ移転している。1979年に陳列室は研究所から独立し、「人類学博物館」として再出発した（伊藤2007）。1983年にはG棟地下2階へ移転をした。そして2013年10月にR棟地下へと移り、現在に至っている（表1：沿革）。R棟に移転した後のG棟の旧博物館は、収蔵庫・発掘調査報告書等の書庫として活用している。

2. 所蔵資料の来歴

当館の所蔵資料は、考古資料、民族誌資料[1]、現代生活史資料[2]に大別される。

収蔵資料の点数は2024年9月時点で以下のとおりである。

考古資料	台帳登録数　約5000点
	未整理資料10万点以上[3]
民族誌資料	約7000点
	写真資料等約50000枚以上
現代生活史資料	約19000点

なお、収蔵資料の正確な数字を把握することは現時点では不可能である。未整理で台帳に登録されていない資料が多くあり、概数でしか把握できていない。

来歴別にすると、①南山大学の調査によるもの、②日本考古学研究所からの移管資料、③1984年頃から収集を始めた現代生活史資料、④他機関や個人からの寄贈資料、⑤標本資料や購入資料に分けることができる。以下では個々の来歴について概説する。

(1) 南山大学の調査によるもの

(a) 考古資料

南山大学の調査による考古資料は、中山英司氏、小林知生氏、吉田章一郎氏、早川正一氏、伊藤秋男氏、重松和男氏ら、人類学研究所員・歴代の考古学系教員による遺跡調査の結果、収蔵されたものである（黒澤2007）（表1：沿革「調査・活動」）。

特に中山氏が携わった発掘調査による出土遺物が非常に大きな単位をなしており、伊川津貝塚、保美貝塚、入海貝塚、西志賀貝塚、清水貝塚、高蔵遺跡、瑞穂遺跡などから出土した遺物は、当館の展示の核となっている。1962年から1971年にかけて、早川氏を中心とした南山大学人類学研究会の考古学サークルが長良川流域の赤土坂遺跡、武芸八幡遺跡、恵日山遺跡などの調査を行い、旧石器時代の石器類を収集し

表 1：沿革

組織	所在	調査・活動	寄贈	刊行物
1949 4 月　南山大学　設立 9 月　人類学民族学研究所　設置 研究所に設けられた陳列室が 博物館の前身である	**1949** 五軒家町キャンパス	**1950** 伊川津貝塚（田原市） 西志賀貝塚（名古屋市） 保美貝塚（田原市） 白山藪古墳（春日井市） 清水遺跡（'56）（西尾市）など **1951** 蓮池古墳（犬山市） 吉胡貝塚（田原市） 大草貝塚（知多市） 入海貝塚（東浦町） 瑞穂遺跡（'52、'54）（名古屋市） など **1952** 光真寺古窯跡（名古屋市） 山ノ田古墳（名古屋市）など		
1954 人類学民族学研究所から人類学 研究所へ名称変更		**1953** 高蔵遺跡（'56）（名古屋市） 形原・佃遺跡（蒲郡市）など	**1958** 日本考古学研究所資料	
		1962 日吉原遺跡（豊川市） **1962 ～ 71** 長良川流域調査シリーズ **1963** 根方岩陰遺跡（岐阜県）		
	1964 山里町キャンパス 図書館地下へ移転	**1964** 東ニューギニア調査団 神明遺跡（豊田市）	**1964** アウフェンアンガー収集資料	
1967 博物館相当施設へ		**1965** 保美貝塚（田原市） **1971** 西坂旧石器遺跡（岐阜県）		
	1973 図書館 3 階へ移転	**1973** 塩屋遺跡（岐阜県）		
1979 人類学研究所から独立し、 「人類学博物館」へ名称変更				**1979** 人類学博物館紀要　刊行開始
	1983 G 棟地下へ移転	**1982** 城山古墳 **1983** 西坂遺跡（多治見市） **1985** 高蔵遺跡夜寒地区調査	**1984 ～** 現代生活史資料　収集開始	**1980** 人類学博物館館報　刊行開始 （～ 2000 年まで）
			2000 上智大学 西北タイ歴史・文化調査団資料	**2000** 人類学博物館紀要　第 19 号 「展示品目録 1　縄文時代編 1」 **2003** 人類学博物館紀要　第 21 号 「寄贈資料目録 1」
			2009 オセアニア民族造形	**2004** 人類学博物館紀要　第 22 号 「展示資料図録―家電製品と少 数民族資料」
	2013 R 棟地下へ移転		**2015** 西江雅之氏収集資料	
				2020 museum notes（収蔵資料紹介） 刊行開始

た[4]。重松による名古屋市高蔵遺跡夜寒地区の調査による資料や、伊藤の報告による名古屋市大須二子山古墳の資料なども東海地方を代表する考古資料である（黒澤 2007）。

(b) 民族誌資料

1964 年の 8 月から 12 月にかけて「南山大学東ニューギニア学術調査団」による現在のパプアニューギニアにおいて学術調査が実施された。戦後初の科学研究費による海外調査として派遣された。本調査団は、団長に沼澤喜市氏（民族学担当）、ヘンリー・アウフェンアンガー神父（民族学担当）、浅井恵倫氏（言語人類学担当）、小林知生氏、早川正一氏（考古学担当）、荻野恒一氏（精神医学担当）の 6 名で組織され、多数の民族誌資料、考古資料を収集した。調査団の帰国後に再度渡航した沼澤氏の収集品も含まれている。後述のアウフェンアンガー神父による寄贈資料が混在しているため、当調査団による収集資料の点数は明確ではないが、パプアニューギニア関連資料の総数は映像資料等も含め 1773 点[5] に及び、その他未整理資料（主に考古資料）が存在する。なお、当該資料

のうち、1964 年の調査後すぐ博物館（当時：陳列室）に収められたのは半数以下の 547 点に留まり、2006 年から実施されたオープンリサーチセンター事業でニューギニア資料の再検討が行われた際に、早川氏の寄贈により 843 点が新規で登録された（早川 2011）。なお、本調査団についてはクネヒト（1998）の報告に詳しい。

(2) 日本考古学研究所移管資料

1958 年の 12 月に、日本考古学研究所が収集・保管していた資料が南山大学に移管された。日本考古学研究所資料については領塚正浩氏（1996、2013）の報告に詳しい。日本考古学研究所は、神言会のジェラード・グロート神父によって 1946 年に設立された。千葉県市川市に拠点を置き、関東地方を中心に発掘調査を行った。1952 年のグロート神父の帰国に伴い、研究所の名称は「考古学研究所」に改められ、ヨハネス・マリンガー神父に引き継がれた。1958 年、考古学研究所の名古屋への移転が決まり、マリンガー神父は所蔵資料の一部を千葉県市川市に寄贈した[(6)]。しかし、マリンガー神父の帰国に伴い、考古学研究所は解体されることになり、大半の収蔵資料は神言会を母体とする南山学園へ移管されるかたちとなった。

日本考古学研究所資料の概要は領塚氏（2013）によると、①グロート神父が来日した 1931 年から研究所設立までに調査・採集・受贈された資料、②グロート神父が主宰していた Oriental Institute[(7)] の調査資料、③日本考古学研究所の調査・採集・受贈資料、④考古学研究所の調査・採集資料の 4 つに分類できる。

①グロート神父が来日後、任地があった新潟・愛知・東京とその近郊で調査・採集した資料で、新潟県黒坊遺跡、千葉県堀之内貝塚、姥山貝塚、須和田遺跡、愛知県雷貝塚などの資料がある。

②東京都貫井遺跡の資料がこれにあたる。

③研究所設立に先行して実施された、神奈川県三戸遺跡と愛知県西志賀貝塚出土資料も含まれる。研究所設立後に実施された青森県最花貝塚、岩手県貝鳥貝塚、茨城県花輪台貝塚、中妻貝塚、千葉県二ツ木貝塚、根古屋貝塚、姥山貝塚、向油田貝塚、木内明神貝塚、中沢貝塚などの出土資料も大きな単位をなしている。他にも、研究員や関係者が個人的に調査・採集した資料も含まれている。江坂輝彌氏が調査・採集した東京都新井遺跡、佐賀県戦場ヶ原遺跡、白崎高保氏が調査した東京都稲荷台遺跡などの資料が挙げられる[(8)]。

④マリンガー神父に引き継がれてからは、調査を行っておらず、1953 年にマリンガー神父、篠遠喜彦氏らが青森県金木砂礫層の調査見学の帰途に、青森県内で調査・採集した資料がわずかに確認できる程度である。

(3) 現代生活史資料収集

当館が所蔵する現代生活史資料は 1984 年から収集が始まった。その全てが寄贈によるものである。2024 年 9 月時点で 72 の個人や世帯、団体から寄贈を受けている。本学の学生や教職員が仲介者となったものがほとんどで、そのため収集地も名古屋市を中心に愛知県内が多い。時代としては、江戸末期から明治期のものも一部含まれるが、大半が昭和初期から昭和 40 年代のもので、総数は 19000 点以上に及ぶ。内容としては、農業や漁業に関する道具やタンス、食器棚などの大型家具、家電製品や日用品、衣類、教科書や玩具など非常に多岐にわたる。

(4) 考古資料・民族誌資料の寄贈

(a) マリンガー神父収集資料

神言会に所属するマリンガー神父は 1952 年にスイスのアントロポス研究所から日本に赴任し、同年 4 月 1 日付けで南山大学人類学科教授、人類学民族学研究所の所員として在籍していた。マリンガー神父が収集したヨーロッパの旧石器時代資料を中心として、東南アジアの旧石器・新石器時代資料、西アジアの中石器・新石器時代資料、中国水洞溝遺跡の石器、オーストラリア先住民の資料など、約 600 点の石器コレクションを指す（領塚 2019）。日本考古学研究所の収蔵資料とともに、1958 年に南山大学へ移管された。

(b) アウフェンアンガー神父収集資料

神言会の神父として 20 年近くパプアニューギニアに滞在し、のちに南山大学で教鞭をとったアウフェンアンガー神父が、パプアニューギニアのセピック河流域で収集した資料が当館に収蔵されている。早川（2011）によると、アウフェンアンガー神父が東ニューギニアの伝道所から名古屋の伝道所に着任された際に、現地から船便で送付したもので、アウトリガーカヌーや精霊像、仮面などがある。前述の通り、アウフェンアンガー神父は南山大学東ニューギニア学術調査団の調査団員として 1964 年にもパプアニューギニアに渡っている。調査団の調査対象は主に高山地帯であったが、その際にアウフェンアンガー神父は沿岸部にも調査に赴いたようで、その際に収集した資料も含まれており、東ニューギニア学術調査団収集資

料と一部混在しているため、詳細な資料数は不明である。

（c）上智大学西北タイ歴史・文化調査団収集資料

当コレクションは2000年に寄贈された。これらは、1969年から1974年にかけて3回おこなわれた「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」が収集した資料で、民族衣装や農具などの生活用具、楽器、儀礼用具などを中心に、約1700点に及ぶ（木田2006）。他にも、カラー・スライド、モノクロ・ネガフィルムが約2万7000枚、儀礼文書の写真複写資料や8ミリフィルムなどがある。資料の受け入れの経緯について重松氏によると、上智大学に在籍する最後の調査団員となった量博満氏が定年退職するにあたり、コレクションの保管が問題となり、①同じカトリック系の大学で親しい関係にあること、②調査団長の白鳥芳郎が南山大学人類学研究所の客員・非常勤研究員（1982–1988・1988–1991）、として在籍されたこと、③民族学資料を所蔵する人類学博物館があること、以上3点を理由に当館に寄贈されることになった（重松2004）。

また、当コレクションに関連して2018年には、第2次調査（1971年10月から1972年2月）に参加した当時淑徳大学助教授であった常見純一氏の研究資料が浦安市郷土資料館より寄贈されることになった。常見氏資料の詳細と受け入れの経緯については当館紀要39号（井原2020）に詳しい。

（d）鶴ヶ島市寄贈オセアニア民族造形資料（通称：今泉コレクション）

当コレクションは2009年に寄贈された。パプアニューギニアを中心としたオセアニアの民族造形品の輸入販売を行っていた大橋昭夫氏が収集し、今泉隆平氏が買い取り、今泉氏の故郷新潟県塩沢町と今泉氏の親族が在住していた埼玉県鶴ヶ島市へ寄贈された資料群で、今泉コレクションと呼んでいる。コレクション成立の詳細等については当館紀要29号（後藤・中尾・如法寺・長谷川2011）に記されている。鶴ヶ島市が所蔵していた資料は、早稲田大学、天理大学天理参考館、当館の3大学博物館へ分割移譲されることになり、当館は東ビスマルク諸島、ソロモン諸島以東の島嶼部地域の資料を受け入れた。総数は170点ほどである。

（e）西江雅之氏[9] 収集　世界各地の民族誌資料（通称：西江コレクション）

当コレクションは2015年に寄贈された。西江氏が生前に収集したコレクションであり、大まかにアフリカ、パプアニューギニア、アンデス地域などの資料が見られ、また、民族資料だけではなく動物のはく製など、種類も多岐にわたっている。コレクションの受入れは、西江氏に教えを受けた加原奈穂子氏によって仲介された。

（f）その他の寄贈資料

大きな単位を成している（a）～（e）の他にも様々な資料が寄贈されている（表2）。

林魁一氏による岐阜県を中心とした土器、石器類が1950年1月に寄贈されたという記録が残っている（秦2020）。

柚木和夫氏の収集資料は、愛知県内を中心とする考古資料で形成されており、約280点が確認できる。大須二子山古墳資料が含まれており、非常に重要なコレ

表2：寄贈記録（一部抜粋）

受贈年	収集 / 寄贈者	資料概要	点数	報告状況
1950年	林魁一氏	土器、石器	482点	紀要40号
1982年以前	柚木和夫氏	愛知県内の考古資料ほか	約250点	館報18号
1990年頃	倉田勇氏	インドネシア染織布	62点	
2000年	上智大学	西北タイ歴史文化調査団	2000点以上	紀要22.23号
2004年	友枝啓泰氏	アンデス民族学画像資料	4万枚以上	紀要24～26号
2007年	玉置嗣郎氏	古地図等	約600点	
2009年	鶴ヶ島市	オセアニア民族造形	170点	
2013年	山口由子氏	バンチェン土器	15点	紀要32号
2014年	倉田美恵子氏	インドネシア資料	184点	
2014年	番澤勉氏	石器、土器、骨角器	875点	紀要36号
2014年	北村一郎・次郎氏	石器	300点以上	紀要35号
2015年	早川正一氏	インドネシア資料、地図等	170点	
2015年	西江雅之氏	世界各地の民族誌資料	900点以上	
2016年	大塚達朗氏	寿能泥炭層遺跡出土土器	316点	
2017年	菊島靖弘氏	東南アジアの民族資料	70点	
2018年	常見純一氏	研究資料（民族・文献等）	1500点	紀要39号
2019年	神言会	外国硬貨	740点	紀要38号
2020年	西江清高氏	中国民族衣装	18点	紀要41号
2021年	酒井登巳子氏	インドネシア染織布他	115点	紀要41号
2022年	丸山徹氏	切手類（冊子状）	11冊	紀要42号
2022年	早川正一氏	貿易陶磁器他	199点	

クションのひとつである。いつ頃寄贈されたか不明だが、1982年に柚木氏へコレクションについてインタビューを行ったと館報18号に記されているため、その時期に寄贈を受けたと思われる。

本学名誉教授の倉田勇氏が収集したインドネシア各地の染織布製品、仮面、木像、装飾品で構成されたコレクションも寄贈されており、特に染織布については約200点と充実した数がある。

2004年にはアンデス文化人類学研究の第一人者である友枝啓泰氏が40年以上にわたるフィールドワークの中で撮影した、4万点を越える写真資料群が寄贈された（如法寺2017）。

2014年には、番澤勉氏が収集した青森県を中心とした東北地方の考古資料コレクション885点や、北村一郎氏・次郎氏が収集した300点を超える石器コレクションが寄贈されている（黒澤・如法寺2018）。

他にも、正確な入手記録、寄贈者の情報が残っていない資料が多々存在する。アイヌ民族資料[10]や、ミクロネシア地域の彫像や仮面[11]、バリ島の日用品類[12]や楽器[13]などがある。

以上の通り、現代生活史資料だけでなく、考古資料・民族誌資料においても、個人や機関から、多岐にわたる貴重な資料の数々を寄贈いただいている。

(5) 標本資料・購入資料

貝や石器の標本資料、貨幣や鏡類に関しては、購入資料とされているが詳細は不明である[14]。

3. 資料整理の状況

(1) 人類学研究所陳列室時代

2（2）のとおり、精力的に発掘調査を行っていた中山英司氏だが、氏が1957年に急逝されたことに伴い、研究所の組織・活動は、「民族学を中心とした、言語学と先史学を補助科学とした文化史的方向の文化人類学の研究所」へ転換することになり、考古学の活動は縮小し、調査に携わった職員も移動することになった。その後、調査記録や出土遺物の中には散逸してしまったものも多数あったようである（安藤2007）。

また、1965年には「人類学研究所の陳列室の拡張について」大学評議会に打診した記録が残っている（南山大学史料室2011）。1958年の日本考古学研究所資料の移管、1964年のニューギニア関連資料（東ニューギニア学術調査団資料とアウフェンアンガー神父収集資料）の増加に伴い、スペースが足りなくなったことを示している。

1968年の南山大学人類学研究所陳列室日誌には、11月13日に「図書館地階からG棟南倉庫へ考古学資料移転」という記述が残っており、陳列室が図書館内にあった時期から考古資料が離れた場所で保管されていたことが確認できる（秦2020）。

1969年に南山大学に助手として着任した伊藤秋男氏は、中山氏の調査の重要性に注目し、散逸した調査記録の収集を積極的に行うとともに、学生を指導して出土遺物の整理を行った（安藤2007）。

(2) 博物館独立後

人類学研究所から独立したのち、所蔵資料の整理・紹介を兼ねた「南山大学人類学博物館紀要」「南山大学人類学博物館館報」の刊行が始まった（表1：沿革「刊行物」）。考古資料を中心に整理作業が進められた。

紀要第1号では、1953年に調査された高蔵遺跡第一次調査の遺物が報告されている。続く紀要第2号では1951年、1952年、1954年に調査された瑞穂遺跡の遺物が報告されるなど、1950年代に中山氏を中心に実施された調査による遺物の再整理・報告がなされている。

1995年以降は、日本考古学研究所関連資料の再整理が行われ、「根古谷貝塚の土器」「中沢貝塚の土器」「木之内明神貝塚の土器」が報告されている。

重松氏（2000）によると、人手不足・資金不足などの理由から長期間未公開のまま倉庫に放置されていたため、木箱の崩壊や錯綜により混乱を生じることとなった。1976年頃、倉庫の様子をみかねた当時の学生らの手によって、箱台帳の作成と遺跡名の洗い出しが行われたが、詳細な遺跡ごとの整理作業に着手することはまだ不可能であった。その後重松氏が担当する博物館実習の学生や職員らによって少しずつ整理作業が続けられた。

また、人類学博物館日誌[15]の1994年7月19日に「地下倉庫 木箱→パン箱」という記載が確認できた。この時期に、崩壊しつつあった木箱から現在のテンバコへ遺物が移されたと考えられる。テンバコには、木箱に記載されていた情報や整理者の名前が転記されている。

2000年には紀要19号で「展示品目録1 縄文時代編1」が、2003年には紀要21号で「寄贈資料目録1」が刊行されるなど、目録公開がなされた。

(3) オープンリサーチセンター事業

2006年から5か年計画で、文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業の「オープンリサーチセンター事業」がスタートした。本事業では、「学術資料の文化資源化に関する研究」を総合的なテーマとしており、「博物館部会」「情報部会」「考古部会」「人類学部会」の4部会を設定し、当館の博物館としてのあり方の検討、博物館資料の研究などを行った（黒澤2014）。

成果として、マリンガーコレクションの整理、保美貝塚の整理、ニューギニア資料の整理があげられ、研究報告第1冊「学術資源の文化資源化」、第2冊「ヨハネス・マリンガー神父と収集された先史時代の遺物」、第3冊「保美貝塚の研究」、第4冊「南山大学人類学博物館所蔵考古資料の研究―高蔵遺跡の研究 / 大須二子山古墳と地域史の研究」、第5冊「南山大学人類学博物館所蔵民族誌資料の研究―タイ北部山地民の現在 / パプアニューギニアの物質文化」が刊行された。

(4) 2013年R棟移転後

2013年10月、R棟地下への博物館移転に伴い、収蔵資料の移動ならびに一部の資料への再採番が行われた。移転前、展示していない資料はG棟博物館の地下にあった南倉庫・北倉庫、事務室西側の西収蔵庫等に収蔵されていた。R棟博物館への移転後、展示していない資料はR棟収蔵庫に加え、G棟旧博物館展示室内、西収蔵庫に集約された。移転後はR棟収蔵庫に収められた資料の台帳情報更新作業を優先的に進めた。台帳の整備状況については次項で報告する。

2018年には、G棟旧博物館の事務室とロビー空間にエレベーターが設置されることになり、博物館のスペースが一部縮小したが（図1）、エレベーターの設置により、R棟とG棟間の資料運搬が容易になった点は非常に大きい。

(5) 近年の考古資料の整理について（2019～2023）

R棟への移転後、南倉庫・北倉庫に収蔵されていた資料がすべてG棟旧博物館の展示室に運び込まれた。考古資料が入った1000箱以上のテンバコは床や旧展示ケース内に積み上げられる形で保管されていた（写真1、2）。同一遺跡のテンバコはまとまって置かれていたが、どのテンバコに何がどれだけ入っているのかがわからない、外部の研究者から資料照会があった際に該当資料の発見に時間を要するなど、活用しづらい状況であった。

2019年に本学の上峯篤史氏指導の下[16]、学生有志によって全テンバコに「任意の通し番号」の付与と、テンバコごとに「資料種類」「遺跡名」「備考」が記載された簡易リストが作成された。この作業によって、これまで記録の無かったG棟旧博物館に収蔵されている考古資料の全容をつかむことが出来た。

2021年度にはG棟旧博物館内へ収納棚の設置計画が立てられた。収納棚の設置に向けて、まず第三展示室内のすべての資料を別の部屋へ仮移動させた（写真3）。その際に、博物館職員、学生アルバイトの手によってすべてのテンバコ内の確認を行い、注記や袋書き、メモに記載された情報などをリストへ反映させた。

2021年5月に収納棚計29台が設置され、計1170箱を地域、遺跡でまとまるように配架した（写真4）（図2）。これによって、各テンバコに所在地（棚番号）情報を付与できた。箱番号については2019年に付与された任意の通し番号をそのまま使用している。

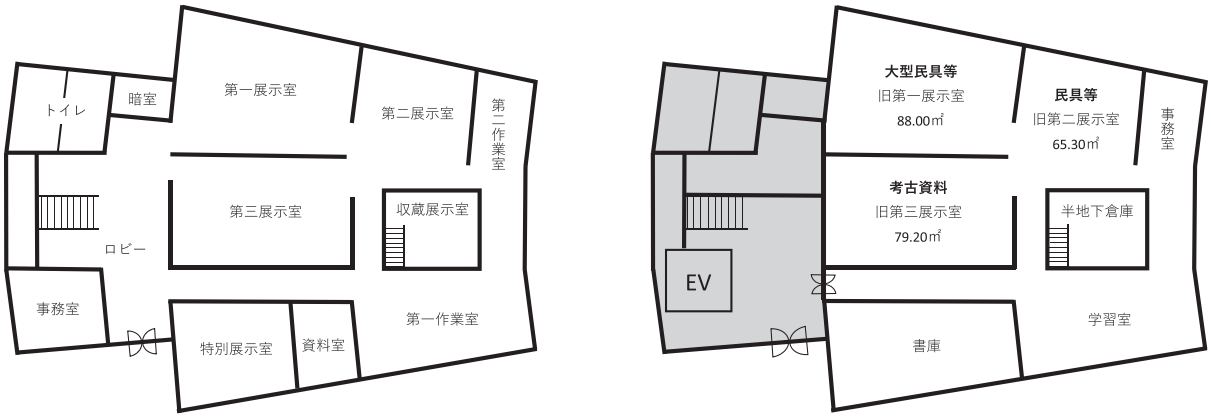


図1：G棟図面　左：1983年頃　右：2018年改修工事後（色付き部分は博物館施設外）

写真 1：旧第三展示室資料移動前
（2021 年 3 月筆者撮影）

写真 2：旧第一展示室
（2021 年 3 月筆者撮影）

写真 3：旧第三展示室資料移動後
（2021 年 4 月筆者撮影）

写真 4：旧第三展示室資料移動後
（2021 年 5 月筆者撮影）

計 1170 箱の内訳は図 2 で示した通りであるが、二ツ木貝塚 45 箱、姥山貝塚 36 箱、高蔵遺跡（1985 年次調査）138 箱、保美貝塚 47 箱などのように、一遺跡で 30 箱以上を占めているものもあれば、一つのテンバコに複数遺跡の遺物が混ざり合っているものもある。例えば、箱番号 20 のテンバコを確認したところ、「東京国分寺、練馬禿山、神奈川下組貝塚、高田貝塚、豊田市平和町山室、野々田 A/B、照光寺、水主町貝塚、瑞穂区上坂町、三重・治田村中山遺跡、木曽駒ケ岳山麓洞穴付近、青森・脇野沢、菊名、西脇町、新潟・古鉄砲町、岐阜アシド、岐阜・恵那坂出、日生が見、長野・渋川表採、群馬・新羽貝塚、長野・西野小馬背、広島・宮脇、他不明」の遺物が入れられていた。それぞれ土器片や石器数点ずつが袋や箱にまとめられており、それぞれの袋や箱に書かれた情報を抽出したが、遺跡名称まで記載があるもの、地名までしかわからないものなど様々である。表採資料や受贈資料であると考えられるが、誰が、いつ、どのように入手したのかを示す情報が欠落している。

他にも完全に「不明」状態のテンバコもある。例えば、箱番号 224 のテンバコには、「土器片 670 点、石器 4 点、貝殻数点、骨片、炭化物他」が入っているが、注記がなく、どの遺跡のものなのか、特定する手段が一切ない。

未整理資料の整理もさることながら、不明資料の特定作業についても検討していきたい。

また、2024 年度より新たに未整理資料の整理作業が始まった。1953 年に調査した蒲郡市の形原・佃遺跡の遺物、テンバコ 38 箱分に当たる。学生アルバイトやボランティアスタッフの手を借りて整理作業を進めており、2026 年の報告を目指している。

4. 台帳整備と公開に向けて

(1) 台帳整備について

当館ではこれまでに何度も台帳の整備やデータベー

図 2：G 棟旧博物館　第三展示室　考古資料配架状況（「西江」は西江雅之コレクションを指す）

ス作成に向けた作業が行われてきた。紀要 19 号や 21 号では一部資料の目録が公開されるに至ったが、その後、移転に伴う所在地の移動が反映されておらず、目録が機能していない状況である。

資料の整備について、石井（2023）が、

> 資料が取り出せない、資料の有無がわからないといった状況は、博物館資料へのアクセスが失われた状態である。さらに、資料そのものが存在したとしても、資料の採取地、寄贈者、使用年代、利用状況等、資料そのものから導き出せない情報が喪失した場合にも博物館が「保管」機能を果たしたとは言えないであろう。博物館における「保管」とは、単に実物資料へのアクセスだけではなく、資料にまつわるデータの一式を含むものと解される。資料台帳は博物館の目的である「保管」の達成手段であり、「目録の頒布」によって広く公開されることにより、「保管」機能を更に強化するものと言える。

と述べているように、博物館において、所蔵資料にアクセスできない状況というのは避けなければならない。2018 年度以降は、資料の所在地の確認作業を集中的に行った。台帳の整備状況は以下のとおりである。

(2) 台帳の整備状況とそれぞれの課題

考古資料

考古資料の台帳は、秦の報告に詳しい（秦 2021）。現在、「考古資料総台帳（表3）」と「R 棟収蔵庫台帳」と「G 棟第三展示室リスト」が存在している。まずは、R 棟収蔵庫にある全資料を確認し、考古資料総台帳に所在地の反映作業を行った。また、G 棟第三展示室のテンバコの整理作業の過程で、所在不明だった資料を多数発見することができている。

また、資料番号の種類が非常に多く、資料 1 点につき複数の資料番号が付与されている場合がある。複数の資料番号が正しく記録されていれば問題ないが、台帳への転記漏れ、番号の重複などが発生し、混乱を招いている。日本考古学研究所移管資料には「J 番号」「登録番号」「遺跡番号」の 3 つが付与されている。また、1985 年に重松氏を中心に発掘調査された高蔵遺跡夜寒地区における出土資料においては、高蔵夜寒のアルファベット「TY」から始まる 4 桁の数字と、紀要 10 号の図版番号「PL ○ - ○」、2010 年度に移転のために再採番された「2010 番号」の 3 つが付与されている。なお、この 3 つの番号のすべてが、注記・台帳に記載されているわけではなく、一つだけが注記されており、台帳には残り二つの番号が記載されている場合がある。

近年新たに収蔵された資料については、寄贈者名を使った番号を付与している。

考古資料は未整理資料や台帳未登録資料が非常に多いため、課題は山積みである。

民族誌資料

民族誌資料はコレクションごとに台帳が存在している。コレクションによって情報量や質に大きな差がある。民族誌資料においても一括台帳の作成を目指したいが、コレクションによって台帳の型式が異なるため、実行できていない。

オープンリサーチセンター事業の一環で再整理がなされたニューギニア資料については、台帳の整備は比較的整っている（表4）。本稿冒頭で述べたように、東ニューギニア学術調査団資料の収集品とアウフェンアンガー神父の収集品とが混在しているため、その精査が必要である。

今泉コレクションも詳細な台帳が作成されている（表5）。受け入れ時に全資料の資料台帳（手書き）が作成され、それらをもとに、データ化している。

上智大学西北タイ歴史・文化調査団資料の台帳については、項目の「旧1」「旧2」が何を指しているか分からないが、最低限の情報は整っている（表6）。

その他の西江コレクションや倉田コレクションなど各コレクションにもそれぞれ資料一覧表が作成されているが、どれも情報量としては簡易的なものである。

コレクションごとに台帳が分かれていることで、資料について調べる際に、どのコレクションに属する資料なのかが分からない場合に、非常に不便である。

現代生活史資料

現代生活史資料については、従来、寄贈家ごとの台帳で管理されてきたものを一括台帳に編集し直した（表7）。なお、当資料は、R棟収蔵庫・G棟旧博物館・G棟西収蔵庫の3カ所に分かれて収蔵されており、一括台帳を作成した際にR棟収蔵庫に収められている資料すべての所在確認・登録を行った。G棟で収蔵している資料については所在地の項目が空欄または「G棟」「西収蔵庫」という表記になっている。「G棟」「西収蔵庫」と言う情報だけでは、その資料を見つけ出すのは困難である。台帳登録資料数約19000点に対して、所在地が「G棟」が2001点、「西収蔵庫」が737点、「空欄」が8000点となっており、1万点近くの資料の所在地が不明瞭な状況である。

(2) 公開に向けて

データベースの作成については、2006年から2010年のオープンリサーチセンター事業の中で、かなり高い水準まで整えられていた。内容については、このプロジェクトを担った本学データサイエンス学科（当時情報理工学部）の河野浩之氏による報告（河野2011）に詳しい。しかし、その後の吉留氏の報告によると、「プロジェクト終了後2年以上が経過し、当時の状況を知っている職員が少なくなってきている（吉留2013）」とあるように、継続はされず、すでに運用は停止している。

2018年にもデータベース構築に向けた動きがあり、Microsoft の Access を使用した一括データベースの作成を試みたが、こちらも作業途中で凍結している。

しかしながら、データベースの作成・公開をすることの重要さは明らかである。収蔵資料についての周知につながり、外部の研究者による問い合わせや資料調査が増えることで収蔵資料についての研究が進むことが期待される。また、いままで博物館に足を運ぶことのなかった利用者層の獲得にもつながるだろう。適切な資料整理・台帳整備を行い、データベースの作成・公開に向けて今後も模索を続けていきたい。

おわりに

以上、当館所蔵資料の来歴とその整理状況について概観した。陳列室設置から75年の歴史を振り返って、改めて、博物館の資料収集に携わった多くの人の思いや整理作業を行った先輩方の努力を実感した。これまでの作業を無駄にせず、過去に行われたことを生かしながら、豊富なコレクションの公開・活用を試みたい。

資料整理について、着実に「所在不明」の資料を減らしていくことを目指したい。また、すべての台帳を完成させることは目指すのではなく、まずは台帳の整備が整っている資料から、順次データベース上での公開に向けて動いていきたいと考えている。

（人類学博物館 特別嘱託）

表 3：考古資料総台帳

コレクション名	国	県	遺跡名	J 番号	登録番号	遺跡番号	注記その他番号	資料名	資料種類	資料部位	資料点数	備考	展示室	収蔵庫棚番号	ポジフィルム作成	集合ポジ作成
日本考古学研究所	日本	千葉県	堀之内貝塚	J-1	1-449	Ⅲ	—	縄文土器	深鉢	復元完形	1	後期・堀之内式	縄文左	展示中	○	

表 4：ニューギニア資料台帳

資料番号	資料名	収蔵場所	収蔵場所確認日	写真	状態	要約	物理的記述	刻印文・刻印説明・刻印場所	材料	技法	測定値 1（cm）	測定値 2（cm）	測定値 3（cm）	取得元	寄託者	構成数	部品・構成説明	記録者	記録日
153	精霊像 Ancestor's figure	Q-2-6 ③	2019/12/4	○	修復必要なし	修復跡なし欠損・破損なし	一木を彫って人形を作っている。（以下省略）	153（注記）台座下面	木	彫刻	高さ 35	肩部分幅 7.5		Sepik		2	像（木）フンドシ（樹皮）	—	2011/2/17

表 5：今泉コレクション台帳

No.		資料名情報		状態情報					記述情報		材料・技術情報			測定情報		
	資料番号	14a	14b	2a			2b	2c	記述情報	4b	9a	9b	9c	10a	10b	10c
	資料番号	資料名	出典	状態			要約	日付	物理的記述	標本現状	材料	技法	部分・部品説明	測定値	単位	測定値
				修復跡	修復の必要	修復箇所、欠損、破損 etc.										
	Ⅳ-99-N	戦闘用楯	パプアニューギニア ニューブリテン島	○	○	修復跡有、修復の必要有、破損有			断面が半円状で、縦に細長く長方形の（以下省略）		木、竹、赤土、石灰、墨	彫刻、彩色	木、竹	全長 136.5 高さ 7.0 幅 31.5	cm	

表 6：上智大学西北タイ資料台帳

資料番号	旧 1	旧 2	日付	地名	民族名	名称	備考 1	備考 2	調査次	展示・収蔵場所	サイ	備考 3	図録用写真撮影	収蔵庫棚番号	収蔵庫箱番号
JC-0001		451-12	72.01.18	Ban Saeng Chai	タイコンムアン	土器　長頸壷	表面　赤色　現様		第 2 次	第 3 展示室	縦 17　横 17　高 27			M-1	—

表 7：現代生活史資料総台帳

資料番号	所在	分類 1	分類 2	品名	材質	寸法	家	家分類	収集年	家所在	備考	その他	その他②
NK001	A-6-4	日	暖房	立型火鉢	木＋銅	高 64.5 径 37 脚部最大幅 40	—	—	19920126	—	内側に緑色の金具付属品（ホーロー高 5.5 上径 11.5 下径 13）灰残存	昭和初期	

註

(1) 博物館で収集・保存・展示される民族調査の成果資料を「民族誌」資料と呼んでいる。民族誌資料とは、物的資料、文書資料、音声資料、映像、画像資料だけでなく、調査者が記録したフィールドノート、写真、地図なども含む、調査の過程で収集されたひとまとまりの資料群全体が該当する（黒澤 2013）。

(2) 現代と直接に結びついた身近な時代である戦後、とくに昭和 30 年代の急速に変化・普及した生活資料を指す（青木 2003）。

(3) G 棟旧博物館　第三展示室に保管されている未整理の考古資料の概数である。考古資料の性質上、破片資料や自然遺物等が多く、1 つのテンバコに 1000 点近く入っているものもある。

(4) 長良川流域調査シリーズとは、1962 年～ 1971 年にかけて、南山大学人類学研究会考古学サークルが実施した長良川流域の旧石器時代の遺跡調査のこと。赤土坂遺跡（1962）、武芸八幡遺跡（1964）、恵日山遺跡（1966）、岩井戸遺跡（1970）、衣岩岩陰遺跡（1971）など。2020 年に G 棟第 1 展示室の整理を行っていた際に、段ボール 5 箱ほどが封をした状態で保管されており、中身を確認したところ、当調査による採集資料と思われる資料が数多く入っていた。

(5) ニューギニア資料 1773 点の内訳は、物的資料が 1390 点、映像資料が 383 点である。

(6) 寄贈された資料は、姥山貝塚、二ツ木（向台）貝塚、平作（三中校庭）貝塚の縄文土器である（領塚 2019）。

(7) Oriental Institute とは、グロート神父が日本考古学研究所設立直前に主宰していた研究機関であるが、その活動については不明な部分が多い（領塚 2013）。

(8) 戦前の調査資料も含まれるが、日本考古学研究所設立以後に、研究所に寄贈されたものであるため、ここに分類した。

(9) 西江雅之氏は言語学・文化人類学者で、主に東アフリカ、カリブ海域、インド洋諸島で言語と文化の研究に従事し、東京外国語大学、東京大学、早稲田大学、東京芸術大学などで教鞭をとった。

(10) 小谷凱宣氏による寄贈資料だと考えられる。

(11) 田沼清氏が収集し、1972 年頃、親族によって寄贈されたものと考えられる。受け入れ時の手紙を参照した。

(12) 資料調査カードに記載されている情報によると、1977 年に鈴木弘子氏より寄贈を受けたとある。

(13) 当時南山大生であった竹尾重人氏がバリ島へフィールドワークに行った際に入手した品をご寄贈品いただいた。2022 年度にご本人から連絡を受け、判明した。

(14) 黒澤（2007）によれば、伊藤秋男氏の未発表の手記によると、人類学科の沼澤氏が学長になり、言語学のレンメルヒルト氏が副学長になった時代に購入したものが多いが、記録がほとんど残っておらず、詳細はわからない、とある。また、南山大学史料室（2011）によれば、「発掘及び蒐集先史時代遺物（石器、土器類）数（中略）合計標本二万点を越ゆ（中略）現生貝類標本（貝塚の貝類研究の資料）三千種　六万点」とあるが、具体的のどの資料を指すか不明である。

(15) 人類学博物館日誌

大学ノート全 74 冊に及び、1986 年 11 月 25 日～ 2008 年 5 月 27 日まで記録されている。

資料受け入れや整理作業の記録など、当時の博物館の活動を知るうえで非常に参考になる情報が記載されている。

(16) 当時作業に従事した学生の記録によると、2019 年 7 月 5 日～ 10 月 19 日にかけて上峯篤史氏の指導の下、人間文化研究科 1 名と人類文化学科学生 6 名で作業をした。

収蔵庫のテンバコに任意に 1 ～ 1040 までの番号を振った（入り口側の壁から順に、養生テープを貼って）。テンバコごとに「資料種類」「遺跡」「備考」の確認をして、リストを作成した。

参考文献

青木俊也 2003「現代生活を展示する―団地 2DK 生活再現展示のその後」『歴史展示とは何か』アム・プロモーション、pp. 81–107

安藤さおり 2007「当館所蔵生活資料の概要」『南山大学人類学博物館紀要第 25 号』、南山大学人類学博物館、pp. 87–93

安藤義弘 2007「中山英司と愛知の遺跡」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会、pp. 383–534

石井淳平 2023「誰もが資料にアクセスできる博物館～資料台帳のデータベース～」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 5―LiDAR・3D データ・デジタルアーカイブ・SNS・GIS・知的財産権』奈良文化財研究所研究報告　第 37 冊　pp. 169–177

伊藤秋男 2007「南山の考古学研究と私の半生」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会、pp. 1–14

井原瑠梨 2020「常見純一氏研究資料の受け入れと整理状況について」『南山大学人類学博物館紀要第 39 号』、南山大学人類学博物館、pp. 39–72

大橋昭夫 2005「現代文明への警鐘――鶴ヶ島市「オセアニア・コレクション」の意義」『埼玉県鶴ヶ島市教育委員会編『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』、pp. 163–210

河野浩之 2011「南山大学人類学博物館の資料デジタル化

—博物館アーカイブ CMS 構築—」『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第 1 冊　学術資料の文化資源化』、pp. 93–101
木田歩 2006「南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史・文化調査団コレクション」『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究 2005 年度報告書』総合地球環境学研究所　研究プロジェクト 4–2　pp. 374–379
クネヒト・ペトロ 1998「南山大学による『東ニューギニア学術調査団』の行動と成果の回顧」『アカデミア人文・社会科学編（67）』、南山大学、pp. 83–108
黒澤浩 2007「人類学博物館の資料収集」『HOMINIS DIGNITAI 1932–2007 南山学園創立 75 周年記念誌』、南山学園創立 75 周年記念誌編纂委員会、pp. 136–139
黒澤浩 2013「民族誌展示の功罪」『明治大学博物館・南山大学人類学博物館合同シンポジウム成果刊行物　博物館資料の再生—自明性への問いとコレクションの文化資源化—』、pp. 253–269
黒澤浩 2014「人類学博物館のリニューアル」『南山大学人類学博物館紀要第 32 号』、南山大学人類学博物館、pp. 1–18
黒澤浩・如法寺慶大 2018「故・番澤勉氏収集の考古資料（1）—土器・土製品—」『南山大学人類学博物館紀要第 36 号』、南山大学人類学博物館、pp. 1–29
後藤明　中尾世治　如法寺慶大　長谷川真美　2011「鶴ヶ島市寄贈・今泉ニューギニア美術コレクションについて」『南山大学人類学博物館紀要第 29 号』、南山大学人類学博物館、pp. 57–65
重松和男 2004「上智大学からの移管の経緯と資料内容」『南山大学人類学博物館紀要第 22 号』、南山大学人類学博物館、pp. 14–15
竹尾美里 2014「アウフェンアンガー師のセピック河流域調査と人類学博物館所蔵資料について」『南山大学人類学博物館紀要第 32 号』、南山大学人類学博物館、pp. 19–26
南山大学史料室 2011「南山学園史料集 6 南山大学の人類学」、南山学園
如法寺慶大 2017「博物館資料の継承に向けて—南山大学人類学博物館所蔵民族誌資料の資料番号の歴史的検討から」『アルケイア—記録・情報・歴史　第 11 号』南山アーカイブズ、pp. 139–177
如法寺慶大 2017「2014 年度に寄贈された石器コレクション」『南山大学人類学博物館紀要第 35 号』、南山大学人類学博物館、pp. 1–39
秦優莉香 2021「南山大学人類学博物館の林魁一コレクション（1）—土器—」『南山大学人類学博物館紀要第 40 号』、南山大学人類学博物館、pp. 1–27
秦優莉香 2021「南山大学人類学博物館所蔵考古資料の現状と課題—資料番号の整理から—」『南山大学人類学博物館紀要第 40 号』、南山大学人類学博物館、pp. 45–54
早川正一 2011「南山大学東ニューギニア学術調査団の高山地帯における人類学調査（1964 年）の回顧とその概要」『南山大学人類学博物館所蔵民族誌資料の研究』南山大学人類学博物館、pp. 127–146
領塚正浩 2011「人類学博物館のコレクションとその展示」『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第 1 冊　学術資料の文化資源化』pp. 141–155
領塚正浩 2013「コレクションの文化資源化と大学・地域博物館の連携～ジェラード・グロート神父と日本考古学研究所のコレクションを中心として～」『明治大学博物館・南山大学人類学博物館合同シンポジウム成果刊行物　博物館資料の再生—自明性への問いとコレクションの文化資源化—』、pp. 204–222
領塚正浩 2019「ヨハネス・マーリンガー神父と考古学研究所」『南山大学人類学博物館紀要第 38 号』pp. 39–52
山崎剛 2006「南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史・文化調査団コレクション　写真資料」『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究　2005 年度報告書』総合地球環境学研究所　研究プロジェクト 4–2　pp. 435–439
吉田泰幸 2009「南山大学人類学博物館所蔵の「考古学研究の研究」に関する資料のアーカイブ化に向けて附・第一展示室展示アルバム作成メモ追記」『南山大学人類学博物館紀要第 27 号』、南山大学人類学博物館、pp. 1–13
吉留正樹 2013「人類学博物館所蔵資料のデータベースの運用にむけて」『南山大学人類学博物館紀要第 31 号』、南山大学人類学博物館、pp. 63–70

The history and current condition of the collection of the Nanzan University Museum of Anthropology

IHARA Ruri

The Nanzan University Museum of Anthropology was established based on the display room attached to the Anthropological Institute (est. 1949), Nanzan University. Since its establishment, the museum has collected various items, reaching more than a hundred thousand. Even so, there remain a lot of sources that are unorganized and not appropriately reported. This means that, although we have a vast collection, many of them are not adequately used for study. The introduction of sources and the release of catalogues have been carried out through the museum's annual bulletins, but we have not prepared an accurate inventory and database. We want to continue the task because the public database is critical for researchers.

2024 年 12 月 15 日　印刷
2024 年 12 月 20 日　発行

南山大学人類学博物館紀要　第 43 号

編集・発行人　南山大学人類学博物館
466-8673　名古屋市昭和区山里町 18
Phone　052(832)3147（直通）
印　　刷　株式会社クイックス
456-0004　名古屋市熱田区桜田町 19-20
Phone　052(871)9190

ANNUAL BULLETIN

OF

Nanzan University Museum of Anthropology

NO. 43　　2024

Nanzan University Museum of

Anthropology

NAGOYA JAPAN